

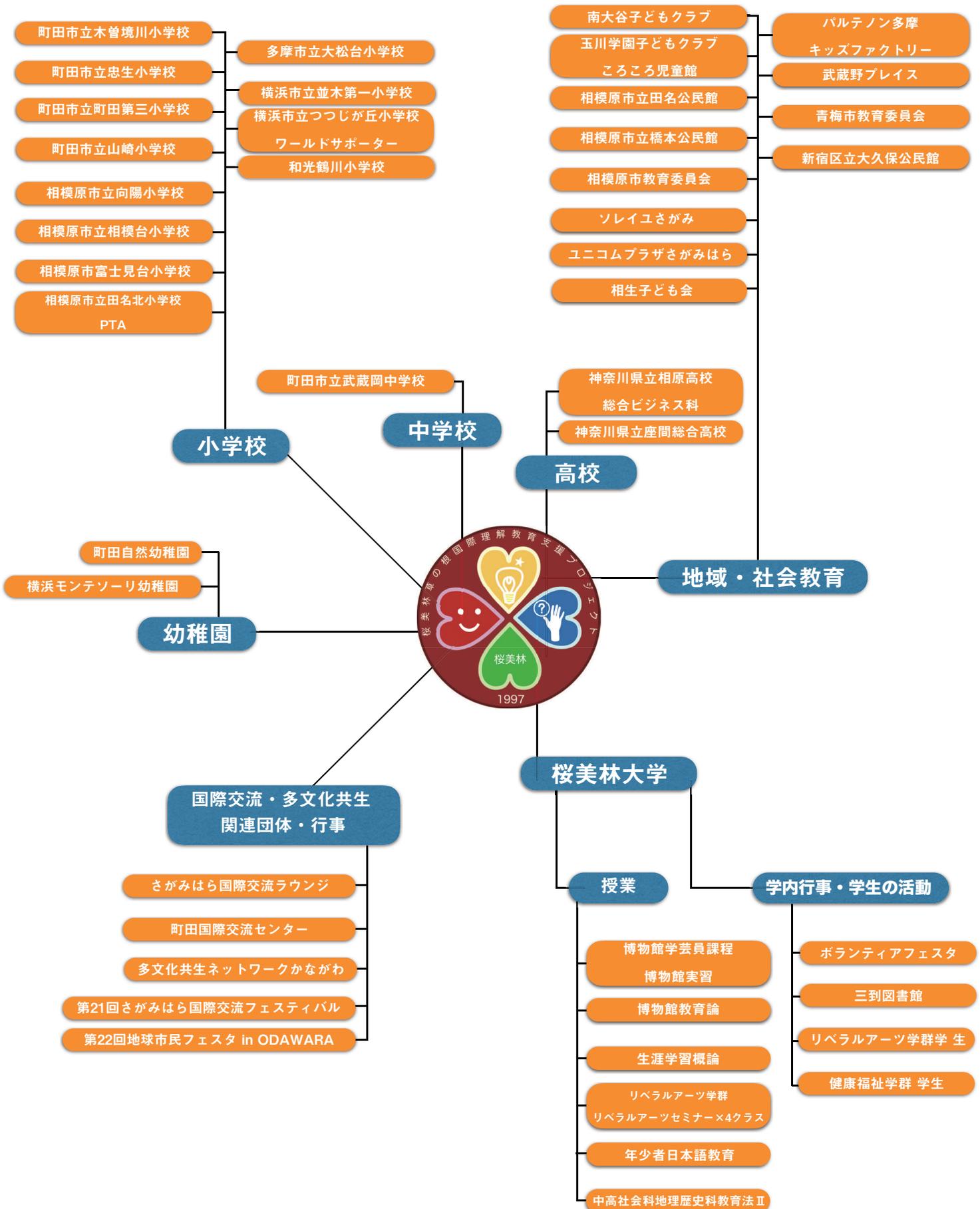


桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ

Vol.6 2017年度

20周年記念特集号

2017年度アウトリーチ教育プログラムの クライアント・連携協力先



桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ Vol. 6 2017 年度

もくじ

2017 年度の活動報告	2
2017 年度のメンバーと活動実績	6
2017 年度アウトリーチ教育プログラム概要	8
—私の経験と学び— 2017 年度卒業の学生スタッフより	30
草の根プロジェクト 20 周年記念特集	
草の根プロジェクト 活動開始 20 周年を迎えて	34
学生の学びと変容を促す 草の根プロジェクトの「ヒトづくり」	38
データで振り返るアウトリーチ教育プログラム	48

草の根プロジェクト 2017年度活動報告

岩本 貴永

アウトリーチ教育コーディネーター兼
エデュケーター

本プロジェクトは、1997年6月の活動開始から20周年を迎えた。そこで2017年度は、本プロジェクトの基幹事業であるアウトリーチ教育プログラムを依頼に応じて実施するだけでなく、より有意義に、かつ学内外の教育現場からの利便性を高めるため、プログラムの整理と広報機能の強化に取り組んだ。さらに、これまでの業績を利用しやすい形に整えるデータベースの構築にも着手した。本稿では2017年度的主要な活動として、これらについて報告する。

アウトリーチ教育プログラムの再編と実践

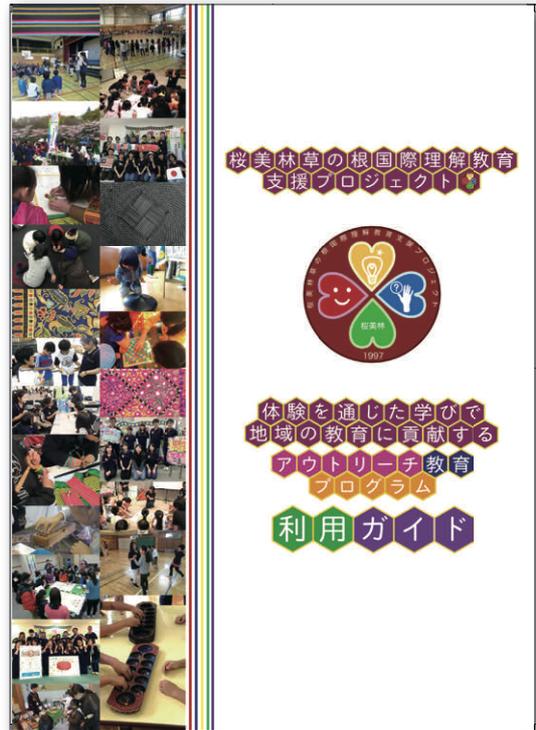
2017年度は、前年までの3種類のアウトリーチ教育プログラムを5つに再編成することでスタートした。再編の構想は前年度の段階でほぼ完成しており、そのまま実行することとなった（詳しくは2016年度の年報および本プロジェクトのパンフレット「アウトリーチ教育プログラム利用ガイド」を参照されたい）。

アウトリーチ教育プログラムの実施件数は最終的に合計73件となった。アウトリーチ教育プログラムの実施件数が70件を超えるのは2015年度から3年連続である。また、アウトリーチ教育プログラムによるワークショップや

出張博物館のほか、実物資料の貸出先における授業や講座等の教育現場に参加した人々の数は計8847名となった。

2017年度の傾向としては、これまでやや減少傾向にあった小学校からの依頼が若干増えたという点が挙げられる。これは、先述した新しいパンフレットやホームページの効果と考えられる。これらの公開後に近年依頼がなかった学校からの問い合わせが増え、国際学生訪問ワークショッププログラム（以下、訪問P）や世界の実物体験ワークショッププログラム（以下、実物体験P）の実施につながった例が見られた。特に、町田市内の小学校は「東京都オリンピック・パラリンピック教育」における活用を念頭に置いた問い合わせがみられた。先生方の話を聞いてみると、留学生に子どもたちと交流してもらいたいというニーズが強く感じられた。

さらに、学内の授業との連携が引き続き継続・拡大しつつあるという点も指摘しておきたい。特に、「リベラルアーツセミナー」という本学リベラルアーツ学群の初年時の必修授業（14～15名クラスが約70開講される）では、4クラスを対象に、世界の実物体験ワークショッププログラムを授業として実施した。これは2014年度から同学群の金子淳先生の協力



本プロジェクトの歴代の「パンフレット」
左から、2002年度、2008年度、2017年度に制作したもの

のもと試行してきたものである。担当教員・学生から好評を得られたため、2018年度からは8クラスに拡大することが決まっている。この授業以外にも、「博物館教育論」、「生涯学習概論」、「博物館実習」といった博物館学芸員課程に関連した授業のほか、教職課程や日本語教育と関連した授業でもワークショップの実施や実物資料の提供等の支援を行なっている。

一方、アウトリーチ教育プログラムを通じた学生の地域社会への参加という観点から見ると、計17名が本プロジェクトに学生スタッフとして加わった。実施した73件のアウトリーチ教育プログラムのうち、43件が教職員・学生スタッフが現場を訪ねて教育活動（ワークショップ、もしくは出張博物館）を実施するタイプであり、その多くに本プロジェクトの学生スタッフが参加した。彼らが現場に足を運んだ回数はこのべ157回となった。

広報メディアの刷新

本プロジェクトが制作している広報用のメディアとしては、紙媒体のパンフレット「アウトリーチ教育プログラム利用ガイド」、ニュースレター、そしてWEB上の公式ホームページ、

フェイスブックページがある。

パンフレットについては、これまで2002年度、2008年度に作成し、町田・相模原地域の学校を中心に配布してきた。それぞれ新たな形の教育支援を始める節目となる時期であった。2017年度は20周年を迎え、アウトリーチ教育プログラムを刷新したということもあり、新たなパンフレットを制作することとした。2008年度版は、A4サイズに近い1枚の紙面に両面印刷し、折りたたんだ簡易なものであった。最新版はA4サイズ18ページフルカラーの冊子で、新しいアウトリーチ教育プログラムを写真をふんだんに取り入れながら紹介するだけでなく、本プロジェクトの大きな特徴である理念や教育リソース、プロフィールや構成するメンバーについても詳しく記載した。パンフレットは、今後、年に1～2回程度発行するニュースレターと合わせて町田・相模原の小中学校を中心に郵送するほか、地域で実施するワークショップや出張博物館でも配布する。

また、同時に公式ホームページもパンフレットの内容に合わせ、より閲覧しやすい形に改めるため、2006年以来となる大幅な刷新を行った。最も大きな変更点は、ワードプレスの導入である。これにより記事の作成・編集・投稿を

ブラウザ上で行うことが可能になり、広報活動におけるホームページの実用性が格段に向上した。これにより、アウトリーチ教育プログラムに関する基本的な情報だけでなく、ワークショップや出張博物館を実施した際の実施報告や、一般公開で実施する行事等の告知に関する記事を容易に公開することができるようになった。ホームページ刷新の効果はさまざまな形が考えられる。実施報告の記事という形で事例がホームページ上に蓄積することで、利用者が依頼を検討する際の参考資料として活用することも可能になるだろう。また、本プロジェクトの認知を広げる効果も高まっていると考えられるが、既に顕在化している事例を2つ紹介する。

一つは、本プロジェクトと連携して授業を行った本学教員を通じて、学外の教育現場につながった事例である。その教員が自身の授業でゲスト講師として招聘したある小学校教員に、本プロジェクトの活動について紹介した。その後、その小学校教員はホームページで本プロジェクトへの理解を深め、アウトリーチ教育プログラムの依頼・実施につながっていった。

もう一つはマスメディアに本プロジェクトが取り上げられるきっかけとなった事例である。2017年3月31日に、NHK Eテレの番組「みんなの2020バンバン ジャパン！」の公式サイト上で本プロジェクトを紹介する動画が公開された (<http://www.nhk.or.jp/tokyo2020/change/eye/articles/banbanjapan-10.html>)。この番組は、東京オリンピック・パラリンピックを前に、日本各地で国際交流に取り組む人々を紹介するものである。担当者によると、ホームページを通じて本プロジェクトについて理解することで、取材の依頼に至ったとのことである。動画では、相模原市立田名公民館における出張博物館や事務室におけるインタビュー等が収録されている。

このように、パンフレットやホームページの刷新により、アウトリーチ教育プログラムの利用を促進するだけでなく、本プロジェクトの認知を広げる効果が見られる。こうした効果は、本学の認知度も高め、オープンに地域と向き合

い、貢献しようとする姿勢を示すことにもつながるだろう。今後もホームページは積極的に活用すると同時に、利用者が活用しやすい形に改善していきたい。

アウトリーチ教育プログラム データベースの構築

本プロジェクトは学内外の教育現場と連携し、多くの教育活動を実践してきた。「アウトリーチ教育プログラム」という名称を用いるようになったのは2008年度であるが、こうした取り組みの始まりは1999年度に始まった留学生の小学校への訪問に遡ることができる。それ以来、2017年度までに本プロジェクトが実施した教育活動は、1147件を数える。活動開始から20周年を迎え、こうした活動実績を活用し、新たな視点から本プロジェクトの価値を見出す試みとして、アウトリーチ教育プログラムの実施履歴のデータベース構築に取り組んだ。円滑に利用するための改良はまだ必要であるが、これまでに実施したアウトリーチ教育プログラムのクライアント及び連携協力先・実施年月日・プログラムの種類については、1147件全てのデータを相互に参照することができるようになっている。どのプログラムを、いつ、どこで実施したのか、また実施先を、「小学校」、「中学校」、「社会教育施設」等のカテゴリで分類し、それぞれの実施件数を知ることができるようになった。さらに、2013年度以降の実績については、開始時刻と終了時刻、活動への参加者数(学習者)、実施に携わった学生スタッフもデータとして登録している。

このようなデータベースの活用による一つの成果として、2013年度以降の学生スタッフには「国際理解教育支援のためのアウトリーチ教育プログラム参加証明書」を発行できるようになったことが挙げられる。この証明書には、それぞれの学生が参加したアウトリーチ教育プログラムの日付及び、クライアント・連携協力先が時系列で全て表記される。アウトリーチ教育プログラムへの学生の参加は、単位やアルバイ


 国際理解教育支援のためのアウトリーチ教育プログラム参加証明書

桜美林大学 リベラルアーツ群
 学籍番号 [REDACTED]
 氏名 [REDACTED]

上記の者は、桜美林大学の根国際理解教育支援プロジェクトの学生スタッフとして、以下
 24回のアウトリーチ教育プログラム実施に携わり、地域の学校教育・社会教育における
 国際交流・国際理解教育の実現に積極的に貢献したことをここに証明します。

2018年3月5日

桜美林大学の根国際理解教育支援プロジェクト
 代表 桜美林大学グローバル・コミュニケーション学群准教授 石塚英枝
 印 印

〒104-0294 東京都町田市常盤町3758 桜美林大学中館301
 公式サイト <http://www2.obirin.ac.jp/kusamonoe>


- 記 -

実施日	クライアント・連携協力先	アウトリーチ教育プログラム名称
2017年7月22日(土)	相模原市教育委員会	異文化体験ワークショッププログラム
2017年7月22日(土)	相模原市教育委員会	異文化体験ワークショッププログラム
2017年8月20日(日)	さがみはら国際交流ラウンジ	世界の食物体験ワークショッププログラム
2017年8月20日(日)	さがみはら国際交流ラウンジ	世界の遊びと衣装の出張体験プログラム
2017年10月11日(日)	さがみはら国際交流ラウンジ	世界の遊びと衣装の出張体験プログラム
2017年10月15日	相模原市立市民・大学交流センターユニコムプラザ	世界の食物体験ワークショッププログラム
2017年11月18日	武蔵野プレス事業部 生涯学習支援係	異文化体験ワークショッププログラム
2016年4月2日(土)	町田さくらまつり実行委員会	世界の遊びと衣装の出張体験プログラム
2016年5月15日(日)	相模台インターナショナルフェスタ実行委員会	世界の遊びと衣装の出張体験プログラム
2016年7月16日(土)	武蔵野プレス事業部 生涯学習支援係	国際学生語学ワークショッププログラム
2016年7月18日(日)	中央区安全・安心と夢のプロジェクト	世界の食物体験ワークショッププログラム
2016年7月23日(土)	相模原市教育委員会	異文化体験ワークショッププログラム

「国際理解教育支援のためのアウトリーチ教育プログラム参加証明書」
(サンプル)



20周年記念企画として10月には、アウトリーチ教育プログラムと実物資料を紹介する展示を栄光館2階と三到図書館で実施した。

ト代を伴わないボランティアである。学業成績だけでなく、学生生活における社会貢献活動への参加の有無やその回数等は、卒業後社会に出て行く際にその学生のポテンシャルを表す一つの材料となるであろう。進路を定めていく上で、自身の能力や実績を周囲に伝えていくのは学生自身であるが、その客観的な裏付けとして本プロジェクトが証明書を出すことで、学生が望ましいキャリアを形成していく助けとなればと考えている。

さらに、もう一つの成果として、これまでに実施したアウトリーチ教育プログラムの展開を振り返り、各プログラムの実施件数、学生の参加数等のデータを本号の20周年記念特集として48～55ページに掲載した。ヒト、モノ、チエ・ワザで学内外の教育に貢献してきた本プロジェクトの足跡である。

データベースについては、今後も改良を加えていく予定である。特に、ワークショップの内容についてもデータとして蓄積できればと考えている。ワークショップの計画を立てる際には、新たな試みとともに、過去の実績で得たノウハウが重要なベースとなる。そうしたノウハウを整理されたデータとして参照することが容易に

なれば、幅広い経験知を活かすことができるようになる。また、蓄積したデータを整理・分類することで、チエ・ワザを本プロジェクトだけでなく広く教育関係者に利用しやすい形に編集し共有することが可能になるかもしれない。限られたリソースで運営している本プロジェクトでは、容易く実現できるものではないかもしれないが、少しずつ改良作業を進めていく。

2017年度の主な活動報告は以上である。53ページに掲載した図4のグラフを見ると、2015年度前後から「学外の学校教育現場」、「学外の社会教育・地域の教育現場」、「桜美林学園内」の割合が概ね三分の一ずつとなっている。本プロジェクトが初期に重視してきた学外における教育支援に加え、近年は学内の教育活動との連携も充実してきたことで、こうした比率になった。桜美林大学の地域貢献事業として、地域の国際理解を特色のある教育で支援しつつ、現場での実践をさまざまな形で学内の教育にも還元する良いサイクルができていないのだろうか。今後もこのサイクルを継続し、地域の学校や社会教育の現場、さらに本学の教育に貢献していきたい。

2017年度メンバーと活動実績

代表

石塚 美枝（教員 / 日本語教育）

運営委員

荒木 晶子（教員 / コミュニケーション）、金子 淳（教員 / 博物館学）

鷹木 恵子（教員 / 文化人類学）、浜田 弘明（教員 / 博物館学）

福原 信広（職員 / 地域社会連携室）

エドゥケーター

清水 貴恵（教員 / 生涯学習・国際理解教育・日本語教育）

エドゥケーター 兼 アウトリーチ教育コーディネーター

岩本 貴永（専属スタッフ / 博物館学芸員有資格者）

学生

<リベラルアーツ学群>

バヤルト オド ツォルモン（ツォモ）、金澤 穂香、戸谷 美森、長田 萌香、小澤 知歩、後藤 優衣、椎橋 郁実、山中 里帆菜、高 斉賢、朴 藝恩、オトゴンバヤル ノミン（ノミン）、石橋 和樹、錦郡 佳奈

<ビジネスマネジメント学群>

呉 文睿、プア ジェyson、グエン チャンバオ ケン（ケン）、郭 采盈

<交換留学生>

ペロニオ ミランダ

<留学生別科>

グェントウイリン（リン）

国際学生訪問ワークショッププログラム

No.	日付	クライアント・連携協力先	会場	参加者数
1	5月29日(月)	神奈川県立相原高等学校総合ビジネス科	桜美林大学 荊冠堂K001	36
2	6月15日(木)	町田市立忠生小学校	同校 体育館	80
3	7月3日(月)	町田市立木曾境川小学校	同校 体育館	59
4	7月3日(月)	町田市立木曾境川小学校	同校 体育館	84
5	7月8日(土)	青梅市教育委員会	青梅市役所会議室	41
6	11月22日(水)	相模原市立富士見小学校	同校 ランチルーム	122
7	12月6日(水)	町田市立武蔵岡中学校	同校 体育館	65
8	12月8日(金)	町田市立町田第三小学校	同校 体育館	96
				583

異文化協働体験ワークショッププログラム

No.	日付	クライアント・連携協力先	会場	参加者数
1	7月8日(土)	青梅市教育委員会	青梅市役所 会議室	28
2	7月22日(土)	相模原市教育委員会	桜美林大学第二国際寮 1階研修室	12
3	7月22日(土)	相模原市教育委員会	桜美林大学第二国際寮 1階研修室	15
4	11月18日(土)	武蔵野プレイス	同館 4階フォーラム	21
5	11月25日(土)	武蔵野プレイス事業部	同館 4階フォーラム	20
6	12月16日(土)	相模原市立田名公民館	同館 和室	10
				106

世界の実物体験ワークショッププログラム

No.	日付	クライアント・連携協力先	会場	参加者数
1	4月15日(土)	相生子ども会	相模原市立弥栄小学校 体育館	59
2	5月16日(火)	リベラルアーツセミナー (川田麻記先生)	桜美林大学 荊冠堂K001	14
3	5月19日(金)	生涯学習概論 (清水貴恵先生)	桜美林大学 荊冠堂K001	36
4	5月24日(水)	桜美林大学サービスラーニングセンター	桜美林大学 明々館1階ラウンジ	16
5	5月25日(木)	リベラルアーツセミナー (井上直子先生)	桜美林大学 サレンバーガー館1203教室	12
6	5月30日(火)	リベラルアーツセミナー (中山市太郎先生)	桜美林大学 荊冠堂K001	15
7	6月2日(金)	リベラルアーツセミナー (阿部温子先生)	桜美林大学 荊冠堂K001	14
8	6月24日(土)	青梅市教育委員会	青梅市福祉センター	23
9	6月24日(土)	青梅市教育委員会	青梅市福祉センター	32
10	7月12日(水)	博物館教育論 (石渡尊子先生)	桜美林大学 待望館903教室	40
11	7月25日(火)	相模原市立向陽小学校	同校 普通教室	5
12	7月25日(火)	相模原市立向陽小学校	同校 普通教室	18
13	7月26日(水)	町田市立忠生小学校	同校 普通教室	14
14	7月26日(水)	町田市立忠生小学校	同校 普通教室	13
15	8月20日(日)	さがみはら国際交流ラウンジ	ソレイユさがみ セミナールーム1	136
16	10月15日(日)	相模原市立市民・大学交流センターユニコムプラザさがみはら	ユニコムプラザさがみはら ミーティングルーム5	30
17	10月27日(金)	生涯学習概論 (清水貴恵先生)	桜美林大学 荊冠堂K001	40
18	11月30日(木)	相模原市立相模台小学校	同校 普通教室 (国際教室)	91
19	12月15日(金)	博物館教育論 (石渡尊子先生)	桜美林大学 明々館A002	50
20	1月19日(金)	年少者日本語教育 (川田麻記先生)	桜美林大学 明々館A715	18
21	2月3日(土)	横浜市立並木第一小学校	同校 視聴覚教室	53
22	2月15日(木)	相模原市立富士見小学校	同校 2年生共用スペース	129
23	2月16日(金)	町田市立山崎小学校	同校 特別教室 (特別支援)	50
				908

世界の遊びと衣装の出張博物館プログラム

No.	日付	クライアント・連携協力先	会場	参加者数
1	5月3日(水)	バルテノン多摩キッズファクトリー	バルテノン多摩キッズファクトリー	195
2	8月20日(日)	さがみはら国際交流ラウンジ	ソレイユさがみ セミナールーム1	136
3	10月1日(日)	さがみはら国際交流ラウンジ	桜美林大学 第二国際寮	750
4	1月21日(日)	ソレイユさがみ	同館 セミナールーム6	171
5	2月25日(日)	小田原地球市民フェスタ実行委員会	川東タウンセンターマロニエ 集会室301	603
6	3月4日(日)	相模原市立田名公民館	同館 小会議室	137
				1992

異文化発見キット貸出プログラム

No.	貸出日	返却日	利用者所属	利用先	参加人数
1	5月18日	5月23日	ME-net(多文化共生教育ネットワークかながわ)	あーすフェスタかながわ「世界のあそびば」民族衣装コーナー	1005
2	5月18日	6月1日	博物館実習「あそんで学ぼう」	博物館学芸員課程「博物館実習」	4
3	5月26日	6月19日	教職課程教育実習	教育実習先	17
4	5月26日	6月19日	教職課程教育実習	教育実習先	80
5	6月27日	7月3日	町田自然幼稚園	町田自然幼稚園地域公開行事	800
6	7月6日	7月19日	相模原市立富士見小学校	相模原市立富士見小学校 3年生対象の授業	146
7	7月6日	7月10日	桜美林大学学生	新宿区大久保に所在することも園の夕涼み会	100
8	7月27日	8月2日	新宿区立大久保図書館	新宿区立大久保図書館	32
9	7月27日	8月7日	多摩市立大松小学校	第35回開発教育全国研究会におけるワークショップ	20
10	7月31日	8月8日	玉川学園子どもクラブころころ児童館	玉川学園子どもクラブころころ児童館	16
11	8月23日	8月31日	町田国際交流センター	町田国際交流センター 児童向け講座	18
12	9月4日	9月13日	横浜市立つじが丘小学校ワールドサポーターズ	横浜市立つじが丘小学校 全クラス対象の授業	500
13	9月4日	11月24日	博物館実習「あそんで学ぼう」	博物館学芸員課程「博物館実習」	4
14	9月11日	9月15日	博物館実習「あそんで学ぼう」	博物館学芸員課程「博物館実習」	4
15	10月4日	10月18日	横浜モンテソーリ幼稚園	横浜モンテソーリ幼稚園保護者による異文化紹介	100
16	10月6日	10月9日	桜美林大学教員	異文化コミュニケーション学会におけるワークショップ	-
17	10月6日	10月16日	相模原市立田名北小学校	相模原市立田名北小学校 PTA行事	200
18	11月2日	11月2日	教職課程関連授業	教職センター「中等社会科・地理歴史科教育法Ⅱ」	20
19	11月2日	11月2日	教職課程関連授業	教職センター「中等社会科・地理歴史科教育法Ⅱ」	20
20	11月2日	11月16日	相模原市立大野小学校	相模原市立大野小学校 4年生学習発表会	119
21	10月19日	11月7日	町田国際交流センター	町田国際交流センター 祭り夢広場	50
22	11月10日	11月17日	神奈川県立座間総合高校	神奈川県立座間総合高校「国際フェスタ」	900
23	11月10日	11月21日	エムジーク企画(ピアノ講師)	相模原市立広陵小学校音楽鑑賞会	100
24	11月20日	11月27日	南大谷子どもクラブ	玉川学園子どもクラブころころ児童館 行事	500
25	11月27日	12月11日	南大谷子どもクラブ	南大谷子どもクラブ 行事	184
26	12月1日	12月5日	町田国際交流センター	まちカフェ・町田国際交流センター	150
27	12月13日	12月13日	桜美林大学学生	桜美林大学 三到図書館学生主催イベント	6
28	2月15日	2月27日	町田市立忠生小学校	町田市立忠生小学校 2年生対象の授業	95
29	3月2日	3月23日	横浜市立つじが丘小学校ワールドサポーターズ	横浜市立つじが丘小学校	-
30	3月6日	3月22日	私立和光鶴川小学校	和光鶴川小学校 1年生対象の授業	68
					5258

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年4月15日(土)10:30～12:00

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相生子ども会

📍会場

相模原市立弥栄小学校 体育館

😊参加者

小学校1～6年生 59名ほか保護者数名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：リン・山中

📖実施内容

イントロダクション→世界のコマの回し方クイズ→回し方紹介→コマ回し体験→振り返り



協力してコマの回し方を考える子どもたち。



動画でコマの回し方を説明した後、保護者も含め全員でコマ回しを体験。

◎実施日時

2017年5月3日(水)11:00～16:00

🌐実施したプログラム

世界の遊びと衣装の出張博物館プログラム

🤝クライアント連携・協力先

パルテノン多摩キッズファクトリー

📍会場

パルテノン多摩キッズファクトリー

😊参加者

195名(年齢制限なし)

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 戸谷・呉・リン・長田・後藤・椎橋・山中

📖実施内容

展示資料：世界のコマ / 世界のけんだま / 世界のボードゲーム・すごろく / 世界の衣装



スペインのコマの回し方を学生スタッフから教わり回す子どもたち。



当日運営に参加した学生スタッフ。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年5月16日(火)16:10～17:40

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

リベラルアーツセミナー(川田麻記先生)

📍会場

桜美林大学 荊冠堂 K001

👤参加者

大学1年生 14名

👩‍🏫実施メンバー

エドゥケーター: 岩本・清水

📖実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム(世界のコマ)→コマの回し方クイズ→コマ回し体験→世界の箸リレー→アンクルン(インドネシアの竹楽器)の合奏→振り返り



イントロダクション。本プロジェクトを紹介しねらいを伝える。



「触察伝言ゲーム」で実物資料を触察する学生。

◎実施日時

2017年5月19日(金)9:00～10:00

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

生涯学習概論(清水貴恵先生)

📍会場

桜美林大学 荊冠堂 K001

👤参加者

大学1～4年生 36名

👩‍🏫実施メンバー

エドゥケーター: 岩本

📖実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム(けんだま)→ブラジルのけんだまチクタク紹介→チクタク工作グループワーク→「生涯学習概論」レクチャー



「チクタク工作グループワーク」に取り組む学生たち。



ワークショップの振り返りは授業の一部として実施された。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

🕒 実施日時

2017年5月24日(水)12:15 ~ 12:45

🎯 実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝 クライアント連携・協力先

桜美林大学サービスラーニングセンター

📍 会場

桜美林大学 明々館 1階ラウンジ

👥 参加者

大学生 16名

👤 実施メンバー

エドゥケーター：岩本

📋 実施内容

草の根プロジェクト紹介→コマの回し方クイズ→コマ回し体験



「コマの回し方クイズ」に取り組む学生たち。



初対面同士であっても、活動を通じてコミュニケーションが促される。

🕒 実施日時

2017年5月25日(木)16:10 ~ 17:40

🎯 実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝 クライアント連携・協力先

リベラルアーツセミナー (井上直子先生)

📍 会場

桜美林大学 サレンバーガー館 1203 教室

👥 参加者

大学1年生 12名

👤 実施メンバー

エドゥケーター：岩本

📋 実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム(世界のコマ)→コマの回し方クイズ→コマ回し体験→世界の箸リレー→アングルン(インドネシアの竹楽器)の合奏→振り返り



イントロダクション。本プロジェクトを紹介しねらいを伝える。



「アングルンの合奏」で合奏方法を考える学生たち。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年5月29日(月)10:30～12:00

🌐実施したプログラム

国際学生訪問ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

神奈川県立相原高等学校総合ビジネス科

📍会場

桜美林大学 荊冠堂 K001

👤参加者

高校3年生 36名

👥実施メンバー

エデュケーター：岩本・清水 / 学生：ツォモ・呉・リン

📖実施内容

イントロダクション→留学生による母国の学校文化クイズ→ゲームによる留学生と高校生のグループ分け→留学生のライフストーリー紹介と質疑応答→振り返り



イントロダクション。ワークショップのねらいを全体で共有する。



留学生と高校生とのグループワーク。

◎実施日時

2017年5月30日(火)16:10～17:40

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

リベラルアーツセミナー (中山市太郎先生)

📍会場

桜美林大学 荊冠堂 K001

👤参加者

大学1年生 15名

👥実施メンバー

エデュケーター：岩本・清水 / 学生：山中

📖実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム (世界のコマ) →コマの回し方クイズ→コマ回し体験→世界の箸リレー→アングルン (インドネシアの竹楽器) の合奏→振り返り



イントロダクション。本プロジェクトを紹介しねらいを伝える。



「触察伝言ゲーム」で仲間から伝えられた情報をもとにコマを探す学生。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年6月2日(金)16:10～17:40

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

リベラルアーツセミナー (阿部温子先生)

📍会場

桜美林大学 荊冠堂 K001

😊参加者

大学1年生 14名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

📖実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム(世界のコマ)→コマの回し方クイズ→コマ回し体験→世界の箸リレー→アンクルン(インドネシアの竹楽器)の合奏→振り返り



アクティビティに入る前にグループ分けをする。



「触察伝言ゲーム」で実物資料の触察に集中している学生。

◎実施日時

2017年6月15日(木)10:30～12:00

🌐実施したプログラム

国際学生訪問ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

町田市立忠生小学校

📍会場

同校 体育館

😊参加者

小学校4年生 80名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ツォモ・呉・リン

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→留学生の母語じゃんけん紹介→じゃんけん大会→振り返り



クイズの後に答えについて解説する留学生。



母国語で子どもたちとじゃんけんをする留学生。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年6月24日(土)10:00～10:50

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

青梅市教育委員会

📍会場

青梅市福祉センター

👤参加者

小学5年生 23名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：椎橋・山中

📋実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム（世界のコマ）→
コマの回し方紹介→コマ回し体験→振り返り



メキシコのコマの回し方をグループで考える子どもたち。



コマの回し方の紹介する学生スタッフ。

◎実施日時

2017年6月24日(土)13:00～13:50

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

青梅市教育委員会

📍会場

青梅市福祉センター

👤参加者

小学6年生～高校1年生 32名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：椎橋・山中

📋実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム（世界のコマ）→
コマの回し方紹介→コマ回し体験→振り返り



「触察伝言ゲーム」でコマを触察する子どもたち。



触察した仲間からの伝言を受けた「発見係」がコマを探し出し紹介する。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年7月3日(月)10:25～11:10

🌐実施したプログラム

国際学生訪問ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

町田市立木曽境川小学校

📍会場

同校 体育館

😊参加者

小学3年生 59名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ツォモ・呉・リン・ケン

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→留学生が各クラスに入り、全員で「輪」をつくる協働アクティビティ→振り返り



留学生による自己紹介。



母国語でじゃんけんの仕方を紹介する留学生。

◎実施日時

2017年7月3日(月)11:15～12:00

🌐実施したプログラム

国際学生訪問ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

町田市立木曽境川小学校

📍会場

同校 体育館

😊参加者

小学4年生 84名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ツォモ・呉・リン・ケン

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→留学生が各クラスに入り、全員で「輪」をつくる協働アクティビティ→振り返り



全員の自己紹介を振り返る。



クイズを出題する留学生。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年7月8日(土)10:00～10:50

🌐実施したプログラム

異文化協働体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

青梅市教育委員会

📍会場

青梅市役所 会議室

👤参加者

小学5年生 28名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ツォモ・呉・郭・クエン・高

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→触察伝言ゲーム(十二支の置物)→振り返り



「触察伝言ゲーム」で触察した物について留学生に伝える子どもたち。



ゲームの最後の答え合わせ。

◎実施日時

2017年7月8日(土)13:00～13:50

🌐実施したプログラム

国際学生訪問ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

青梅市教育委員会

📍会場

青梅市役所 会議室

👤参加者

小学6年生～高校1年生 41名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ツォモ・呉・郭・クエン・高

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→振り返り



イントロダクション。ねらいを全体で共有する。



留学生によるクイズ。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年7月12日(水)16:10～17:40

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

博物館教育論(石渡尊子先生)

📍会場

桜美林大学 待望館 903 教室

😊参加者

大学1～4年生 40名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本

📖実施内容

草の根プロジェクトの活動内容についての説明(レクチャー)→触察伝言ゲーム(コマ)→コマの回し方紹介→実物を活用したアクティビティについてのレクチャー



「触察伝言ゲーム」で伝言で得た情報を頼りに探するためコマを観察。



観察して探し出したコマを「発見係」が紹介する。

◎実施日時

2017年7月22日(土)10:00～12:00

🌐実施したプログラム

異文化協働体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市教育委員会

📍会場

桜美林大学第二国際寮 1階研修室

😊参加者

小学1～3年生 12名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ツォモ・金澤・戸谷・呉・リン・長田・小澤・椎橋・山中・クエン・郭・高・朴

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→民族衣装体験・記念写真撮影→インドの「へびとはしご」紹介・体験→「へびとはしご」工作→振り返り



イントロダクション。ねらいを全体で共有する。



民族衣装を着た後の記念写真。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年7月22日(土)14:00～16:00

🌐実施したプログラム

異文化協働体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市教育委員会

📍会場

桜美林大学 第二国際寮

👤参加者

小学4年生～6年生 15名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ツォモ・金澤・戸谷・呉・リン・長田・小澤・椎橋・山中・クエン・郭・高・朴

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→民族衣装体験・記念写真撮影→インドの「パチシ」紹介・体験→「へびとはしご」工作→振り返り



「パチシ」を一緒に体験する子どもたちと留学生。



民族衣装を着た後の記念写真。

◎実施日時

2017年7月25日(火)9:00～10:20

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市立向陽小学校

📍会場

同校 普通教室

👤参加者

小学4年生～6年生 5名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

📖実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム(コマ)→コマの回し方クイズ→コマ回し体験



スペインのコマの回し方を考える子どもたち。



インドネシアのコマを回す準備をする。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年7月25日(火)10:40～12:00

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市立向陽小学校

📍会場

同校 普通教室

😊参加者

小学1～3年生 18名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

📖実施内容

イントロダクション→インドの「へびとはしご」紹介→
「へびとはしご」体験



「へびとはしご」の遊び方を紹介するエドゥケーター。



「へびとはしご」を体験する子どもたち。

◎実施日時

2017年7月26日(水)13:30～14:30

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

町田市立忠生小学校

📍会場

同校 普通教室

😊参加者

小学1～3年生 14名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

📖実施内容

イントロダクション→インドの「へびとはしご」紹介→
「へびとはしご」体験→「へびとはしご」工作



「へびとはしご」を体験する子どもたち。



オリジナル「へびとはしご」工作に取り組んでいる子どもたち。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年7月26日(水)14:50～16:00

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

町田市立忠生小学校

📍会場

同校 普通教室

👤参加者

小学4～6年生 13名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

📖実施内容

イントロダクション→インドの「パチシ」紹介→「パチシ」体験→「へびとはしご」紹介→「へびとはしご」体験→「へびとはしご」工作



「パチシ」を体験する子どもたち。



オリジナルの「へびとはしご」を作る。

◎実施日時

2017年8月20日(日)10:00～11:00

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

さがみはら国際交流ラウンジ

📍会場

ソレイユさがみ セミナールーム1

👤参加者

136名(年齢制限なし)

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・小澤・後藤・椎橋・郭・高・石橋

📖実施内容

イントロダクション→コマの回し方クイズ→コマの回し方紹介→コマ回し体験*終了後連続して出張博物館に移行



インドネシアのコマを回す。



非常に珍しい大型のコマも実演して紹介した。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年8月20日(日)11:00～12:00

🌐実施したプログラム

世界の遊びと衣装の出張博物館プログラム

🤝クライアント連携・協力先

さがみはら国際交流ラウンジ

📍会場

ソレイユさがみ セミナールーム1

😊参加者

136名(年齢制限なし)

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・小澤・後藤・椎橋・郭・高・石橋

📖実施内容

展示資料：世界のコマ、世界のけんだま、へびとはしご
*ワークショップから連続して実施。展示資料の紹介後、終了時間まで自由体験。



世界のけんだまを楽しむ家族連れ。



インドのすごろく「へびとはしご」を体験する子どもたち。

◎実施日時

2017年10月1日(日)10:00～16:00

🌐実施したプログラム

世界の遊びと衣装の出張博物館プログラム

🤝クライアント連携・協力先

さがみはら国際交流ラウンジ

📍会場

桜美林大学 第二国際寮 1階ラウンジ

😊参加者

750名(年齢制限なし)

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：ツオモ・金澤・戸谷・呉・後藤・椎橋・山中・クエン・郭・高・朴・石橋・錦郡

📖実施内容

展示資料：世界のコマ / 世界のけんだま / 世界のボードゲーム・すごろく / 世界の服・帽子



会場内の様子。来場者数はこれまでの出張博物館で最多となった。



運営に参加した学生スタッフ。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年10月15日(日)10:00～16:00

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市立市民・大学交流センターユニコムプラザさがみはら

📍会場

ユニコムプラザさがみはら ミーティングルーム5

👤参加者

小学校1～6年生30名(50分ずつ4回に分けて実施)

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・戸谷・長田・小澤・後藤・山中・石橋

📋実施内容

イントロダクション→「へびとはしご」の遊び方紹介→「へびとはしご」体験→「へびとはしご」工作*4回に分けて実施



「へびとはしご」の遊び方を紹介する学生スタッフ。



「へびとはしご」を作る子どもたちとサポートする学生スタッフ。

◎実施日時

2017年10月27日(金)14:30～15:30

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

生涯学習概論(清水貴恵先生)

📍会場

桜美林大学 荊冠堂 K001

👤参加者

大学1～4年生40名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本

📋実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム(けんだま)→ブラジルのけんだまチクタク紹介→チクタク工作グループワーク→「生涯学習概論」レクチャー



「チクタク工作グループワーク」に取り組む学生。



役割が制限されたグループ同士が協力してチクタクを完成させる。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年11月18日(土)14:00～16:00

🎯実施したプログラム

異文化協働体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

武蔵野プレイス事業部 生涯学習支援係

📍会場

武蔵野プレイス 4階フォーラム

😊参加者

小学1～3年生 21名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ジェイソン・金澤・呉・椎橋・山中・クエン・郭・ノミン・ペロニオ

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→コマの回し方伝言ゲーム→世界の遊び体験(コマ・けんだま)→ブラジルのけんだま工作→振り返り



クイズを出題する留学生。



「コマの回し方伝言ゲーム」で子どもたちに回し方を伝える留学生。

◎実施日時

2017年11月22日(水)9:40～11:35

🎯実施したプログラム

国際学生訪問ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市立富士見小学校

📍会場

同校 ランチルーム

😊参加者

小学3年生 122名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ジェイソン・郭・朴

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・習慣)→振り返り



テストの「まるつけ」の仕方を比較して子どもたちに紹介。



留学生からのクイズに対し、じゃんけんの手の形で答える子どもたち。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年11月25日(土)14:00～16:00

📍実施したプログラム

異文化協働体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

武蔵野プレイス事業部 生涯学習支援係

📍会場

武蔵野プレイス 4階フォーラム

👤参加者

小学1～3年生 20名

👤実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：呉・長田・後藤・郭・高・朴・石橋

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・食文化・習慣)→コマの回し方伝言ゲーム→世界の遊び体験(コマ・けんだま)→ブラジルのけんだま工作→振り返り



クイズを出題する留学生。



留学生から説明を聞きコマを回す子どもたち。

◎実施日時

2017年11月30日(木)9:45～12:25

📍実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市立相模台小学校

📍会場

同校 普通教室(国際教室)

👤参加者

小学6年生 91名

👤実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：小澤・椎橋

📖実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム(コマ)→コマの回し方紹介→振り返り



コマを触察する子どもたち。



コマ回し方の紹介を食い入るように見つめる子どもたち。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年12月6日(水)13:30～14:20

🌐実施したプログラム

国際学生訪問ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

町田市立武蔵岡中学校

📍会場

同校 体育館

😊参加者

中学1～3年生65名・教員約10名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ジェイソン・クエン・郭

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・習慣)→振り返り



クイズの正解発表後に解説をしている留学生。



文化を比較するクイズに答える留学生。

◎実施日時

2017年12月8日(金)9:20～10:20

🌐実施したプログラム

国際学生訪問ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

町田市立町田第三小学校

📍会場

同校 体育館

😊参加者

小学6年生96名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ジェイソン・ツォモ・朴

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(学校文化・習慣)→留学生が各クラスに入り、全員で「輪」をつくる協働アクティビティ→振り返り



イントロダクション。ねらいを全体で共有する。



留学生対子どものじゃんけん大会。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2017年12月15日(金)10:40～12:10

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

博物館教育論(リベラルアーツ学群)

📍会場

桜美林大学 明々館 A002

👤参加者

大学1～4年生 50名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本

📖実施内容

草の根プロジェクトの活動内容についての説明(レクチャー)→触察伝言ゲーム(コマ)→コマの回し方紹介→実物を活用したアクティビティについての説明(レクチャー)



コマの回し方をグループごとに考える学生たち。



クラス全体を4～5名ずつに分けてグループワークを行なった。

◎実施日時

2017年12月16日(土)10:00～12:00

🌐実施したプログラム

異文化協働体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市立田名公民館

📍会場

同館 和室

👤参加者

小学4～6年生 10名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本 / 学生：ツォモ・高・朴・ノミン・ペロニオ

📖実施内容

イントロダクション→自己紹介→クイズ(習慣)→触察伝言ゲーム(十二支の置物)→韓国の「ユンノリ」紹介→「ユンノリ」体験→リレー書道→振り返り



留学生にルールを教わり、ユンノリを体験する子どもたち。



子ども、留学生、保護者で一人一画ずつ書く「リレー書道」。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2018年1月19日(金)12:50～14:20

🌐実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

年少者日本語教育(川田麻紀先生)

📍会場

桜美林大学 明々館 A715

😊参加者

大学3～4年生 18名

👥実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水/学生:ツォモ

📖実施内容

イントロダクション→触察伝言ゲーム(コマ)→コマの
回し方クイズ→双方向伝言ゲーム(ユンノリ・マンカラ)



コマの回し方をグループごとに考える学生たち。



「マンカラ」のルールを確認する学生たち。

◎実施日時

2018年1月21日(日)10:25～12:25

🌐実施したプログラム

世界の遊びと衣装の出張博物館プログラム

🤝クライアント連携・協力先

ソレイユさがみ

📍会場

同館 セミナールーム6

😊参加者

171名(年齢制限なし)

👥実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水/学生:ツォモ・金澤・戸
谷・長田・小澤・後藤・椎橋・山中・高・石橋・錦郡

📖実施内容

展示資料:世界のコマ/世界のけんだま/世界のボード
ゲーム・すごろく/世界の服・帽子



けんだまを体験する子どもたち。



「へびとはしご」の遊び方を紹介する学生スタッフ。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2018年2月3日(土)10:35～12:15

📍実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

横浜市立並木第一小学校

📍会場

同校 視聴覚室

👤参加者

小学2年生 53名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：小澤・椎橋・山中・石橋

📖実施内容

イントロダクション→遊び道具のレビュー→3グループに分かれてローテーションで「インドネシアのコマ」、「へびとはしご」、「世界のけんだま」を体験→振り返り



「へびとはしご」を体験する子どもたち。



世界のけんだまを体験する子どもたち

◎実施日時

2018年2月15日(木)9:40～11:30

📍実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市立富士見小学校

📍会場

同校 2年生共用スペース

👤参加者

小学2年生 129名

👥実施メンバー

エドゥケーター：清水・岩本

📖実施内容

イントロダクション→モンゴル紹介・クイズ→「馬頭琴体験」、「民族衣装体験」、「馬頭琴のCD鑑賞」、「ワークシート記入」を4クラスローテーションで実施



イントロダクション。



伝統家屋「ゲル」のミニチュアを観察する子どもたち。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2018年2月16日(金)9:35～11:25

🌍実施したプログラム

世界の実物体験ワークショッププログラム

🤝クライアント連携・協力先

町田市立山崎小学校

📍会場

同校 特別教室 (特別支援)

😊参加者

小学6年生 50名

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：後藤・椎橋・山中・石橋

📖実施内容

イントロダクション→世界の楽器の音クイズ→世界の楽器自由体験→インドネシアの竹楽器「アングルン」合奏→振り返り



「世界の楽器の音クイズ」答えだと思ふ楽器を全員で指し示す。



「アングルン」の音の出し方を子どもたちに紹介する学生スタッフ。

◎実施日時

2018年2月25日(日)10:00～16:00

🌍実施したプログラム

世界の遊びと衣装の出張博物館プログラム

🤝クライアント連携・協力先

小田原地球市民フェスタ実行委員会

📍会場

川東タウンセンターマロニエ 集会室 301

😊参加者

603名 (年齢制限なし)

👥実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・小澤・椎橋・山中・石橋

📖実施内容

展示資料：世界のコマ / 世界のけんだま / インドの「へびとはしご」 / 世界の服・帽子



さまざまな国の民族衣装を着て記念撮影をする家族連れ。



インドネシアのコマに挑戦する家族連れ。

2017年度アウトリーチ教育プログラム概要

◎実施日時

2018年3月4日(日)10:00～14:30

🌐実施したプログラム

世界の遊びと衣装の出張博物館プログラム

🤝クライアント連携・協力先

相模原市立田名公民館

📍会場

同館 小会議室

😊参加者

140名(年齢制限なし)

👤実施メンバー

エデュケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・椎橋・山中・
ケン・石橋

📖実施内容

展示資料：世界のボードゲーム・すごろく等



「ユンノリ」の遊び方を子どもたちに紹介する学生スタッフ。



「マンカラ」の遊び方を紹介する学生スタッフ。



—私の経験と学び—

2017 年度に卒業した学生スタッフより



プア ジェイソン
潘 哲紳



マレーシア

2018年3月ビジネスマネジメント学群卒業
活動期間 2014年度春学期～2017年度秋学期
アウトリーチ教育プログラムの参加回数 22回

私は2014年に桜美林大学ビジネスマネジメント学群に入学しました。当時、この大学には、私以外のマレーシア人留学生がいませんでした。私は友だちも全然なく、一人で入学しました。そのとき、私は「このままじゃ、だめだ。」と考え、楽しくいい思い出がいっぱいの留学生活を送れるような活動の情報を、ずっといろいろな人に尋ねていました。そんなある日、偶然にも、大学の国際寮の掲示板に貼られていた草の根国際理解教育支援プロジェクトのポスターを見つけました。そこに載っていた活動写真を見て、「楽しそうな活動がいっぱいありそうだ。そして、ここでなら国際理解ができる。日本の文化も学ぶことができ、留学生活にも早く慣れることができるだろう。」と考え、草の根プロジェクトに参加することにしました。

私は、韓国留学の1年をのぞき、草の根プロジェクトで3年間活動し、たくさんのことを学びました。まず、最も印象に残っていることは、日本の学校文化です。草の根プロジェクトを通じ、普段、留学生の私たちが訪問できない日本の小・中・高校へ行くことができました。日本の学校教育現場を見られるだけでなく、日本の子どもたちと実際に交流でき、とてもいい体験ができました。そこで、私が気づいたこと

は、日本とマレーシアの学校教育には全く違うことがたくさんあるということです。例えば、マレーシアの学校には給食はなく、子どもたちは学校の食堂で好きな物を買います。草の根プロジェクトで訪れたある小学校では、子どもたちと給食を食べました。それは非常に貴重な体験となりました。

草の根プロジェクトで留学生が行う活動は、自国について子どもたちに一方的に伝え、交流するだけではありません。共に活動する留学生の間でも相互理解ができます。活動準備のために、私たちメンバーは毎週一回集まります。そのミーティングで私が気づいたことは、私達が自国で身につけた生活習慣や文化というのは、日本や他の国々と違うということです。日本での生活に慣れてくると、マレーシア独自のことやその違いにだんだん気づけなくなっていくます。しかし、メンバー皆が違う国から来ているので、皆と交流するなかでマレーシアのことを改めて気づくことができました。そして、互いの言葉、習慣、ジャスチャー、音楽、服装なども学びました。

日本語が母語ではない留学生の私たちにとって、「伝える」ことはそれほど簡単なことではありません。だから、特に、相手が子どもの場



2014年7月5日に武蔵野プレイスで実施した異文化協働体験ワークショッププログラムにて。(中央右側)



2015年6月20日に武蔵野プレイスで実施した異文化協働体験ワークショッププログラムにて。(中央机の後ろ)



2015年8月6日に本学第二国際寮で実施した異文化協働体験ワークショッププログラムにて。(前から2列目の一番右)



2017年12月8日に町田市立町田第三小学校で実施した国際学生訪問ワークショッププログラムにて。

合は、どう工夫すれば言いたいことが使えられるのか、その準備はすごく大事だと思います。しかし、実際に活動して私が思うことは、実は、伝えることはそれほど難しいことではないということです。国際理解において、言葉だけで全てを上手に伝えることはできません。そのような時、私たちはジェスチャー、クイズ、遊び、楽器など様々な方法を使うことで、国を超えた理解ができました。これは国際理解の大きな魅力です！

さらに、聞き手の子どもたちの注目もすごく大事です。子どもたちとの活動の初めに、いつも清水先生が話しているように、「聴く」ことは大切なことです！「耳」＋「目」＋「心」で「聴」の漢字はできています。どれかひとつでも足りないと、伝え合うことはできなくなってしまいます。相互理解とは、伝え手と聞き手の両方の力を合わせた結果なのです。だから、他の人の話を「聴く」ことは凄く大事だと気づきました。このことは、ここでの活動だけではなく、私の将来にも役立つスキルだと思います。

また、岩本先生の遊び道具作りは、凄くよい発想だと思います。これまでに、私はブラジルのけん玉「チクタク」やインドネシアのこま「ガシン」を作りました。外国のいろいろな遊び道

具を研究し、いろいろな工夫をして、身近な材料や道具を使って簡単に作れるようなアクティビティを考えていた岩本先生に、私は感動しました。自分で何かを作ることができると、子どもたちにはその活動の思い出が強く残り、そこから国際理解ができると思います。

私が一番好きな日本語のことわざは、「会うは別れの始め」です。この3年間、草の根プロジェクトで活動し、様々な留学生・日本人学生と出会えました。思い出がいっぱいです。私の日本留学の中で一番貴重な体験です。今までの活動は皆の協力の上に成り立っています。どうもありがとう！「国際理解は教科書には載っていない。だから、今すぐ学びを探しに行こう！たくさんの人に伝えに行こう！」と、後輩に伝えたいです。そして、特に留学生メンバーの皆さん、ぜひこれからもこの活動を頑張って続けてください。先生方、いつも支えてくださり、ありがとうございました。世界は広く、まだまだ知らないことがたくさんあります。卒業後も私は国際理解を続けていきます。そして、今後も草の根プロジェクトの活躍を心よりお祈りしています。

—私の経験と学び—

2017 年度に卒業した学生スタッフより



グエン トウイ リン
Nguyen Thuy Linh



ベトナム

2017年7月日本言語文化学院(留学生別科)卒業
活動期間 2016年度秋学期～2017年度春学期
アウトリーチ教育プログラムの参加回数 17回

私は2016年9月から2017年8月までの1年間、桜美林大学留学生別科に留学しました。実際の日本語と日本人に触れたいと考えていました。

留学してすぐ、草の根国際理解教育支援プロジェクトで活動していた先輩から誘われ、2016年10月初めの世界の遊びと衣装の出張博物館に参加してみました。この日が草の根プロジェクトとの出会いでした。このときの私はすごく緊張していたので、活動の有意義さと楽しみがあまりよく分かりませんでした。しかし、留学生である私に対し、先生方や学生スタッフが気を配り、微笑んでサポートしてくれました。こうして、私は草の根プロジェクトのメンバーになりました。

1年間の活動の中で特に印象に残っていることは、2017年に訪れたある小学校での出来事です。ワークショップを終えたあと、子どもた

ちが私のところへやって来て自己紹介し、握手してくれました。本当に嬉しく、充実感を得ることができました。あの子どもたちのあどけない笑顔と親切な行動。この記憶は絶対に忘れることはないでしょう。

このような活動を重ね、かつては「子どもは面倒なものだ」と思っていた私の気持ちや考えは、だんだん変わっていきました。「子どもたちともっと出会い、もっと話したい。」「私の故郷や遊びについて、もっと簡単にわかりやすく伝えたい。」と思うようになりました。

しかし、一方で、自分自身が変われば変わるほど、自分の限られた日本語でどのように伝えたらよいかと、言語的な面で非常に悩むようにもなりました。そんな私の悩みを清水先生と岩本先生は理解し、励ましてくれました。「もし日本語が上手にできる人がいいなら、日本に長く暮らし、子どもにも授業ができるような大人



2017年5月3日にパルテノン多摩キッズファクトリーで実施した世界の遊びと衣装の出張博物館にて。(左から2人目)



2017年5月29日に神奈川県立相原高校総合ビジネス科3年生を対象に行った国際学生訪問ワークショッププログラムにて。



2017年7月3日に町田市立木曽境川小学校で実施した国際学生訪問ワークショッププログラムにて。(左から一人目)



2017年7月22日に本学第二国際寮で実施した異文化協働体験ワークショッププログラムにて。(最前列左から一人目)

や専門家でもいいでしょう。でも、ここでは留学生だけでやっているでしょう。それにはちゃんと意味があるの。例えば、日本語を学習中の留学生だからこそ、子どもたちが「聴く」を頑張る。子どもたちが本当の異文化コミュニケーションを体験するのに留学生の存在が必要なんだよ。」こうして、いつも落ち込むたびに、先生方の応援のおかげで、私は元気を出し、楽しく活動に取り組んでいきました。

草の根プロジェクトに参加して得たことは、やはり自分の成長です。外国人の立場から見ると、テキストでは見られないような日本や日本人の振る舞いなどを知ることができました。学習者の立場から見ると、見慣れた遊び道具とささやかなことばのやりとりなどを通じ、異文化理解や他者との協働力を身につけることができました。それに加え、国籍を超えた貴重な仲間も得ることができました。

帰国後は、草の根プロジェクトでの経験から得たことを活かし、いい教師になりたいと思います。これから活動を続ける後輩の皆さんには、大変なことに直面した時に、自分の最初の活動への参加理由を再び考えることと、最後の活動を迎えたときの成長結果を思い描くことを伝えたいです。最後にもう一度、心より感謝の意を申し上げます。どうもありがとうございました。



1997年9月26日
第2回研究会 本学太平館



2002年8月26日
「子どもも大人も遊びも町田展」



2003年1月31日
武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア



2007年1月27日
相模原市立淵野辺小学校



2007年8月19日
又たびネット 東京国際フォーラム



2007年10月13日
世界発見子ども広場 町田市立忠生小学校



2009年12月12日
世界発見子ども広場 町田市立町田第一小学校



2010年5月22日
世界発見子ども広場 山崎子ども教室



2011年10月22日
世界発見子ども広場 本学荊冠堂



2014年10月12日
みはら国際交流フェスティバル



2015年5月16日
世界発見子ども広場 町田市立忠生小学校



2015年6月20日
武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア



2003年6月7・8日
本国際理解教育学会第13回研究大会



2005年10月2日
グローバルフェスタ JAPAN 日比谷公園



2006年12月9日
世界発見子ども広場 町田市立山崎小学校



2008年6月26日
武蔵野市土曜学校 世界を知る会ジュニア



2008年5月17日
世界発見子ども広場 町田市立山崎小学校



2008年6月21日
武蔵野市土曜学校 世界を知る会ジュニア

桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト 20周年記念特集

1997—2017



2012年1月28日
世界発見子ども広場 ソレイユをかみ



2012年6月16日
武蔵野市世界を知る会ジュニア



2013年10月13日
さがみはら国際交流フェスティバル



2015年10月11日
さがみはら国際交流フェスティバル



2016年7月23日
世界発見子ども広場 本学第二国際寮



2017年2月26日
地球市民フェスタ in ODWARA

草の根プロジェクト 活動開始 20 周年を迎えて

石塚 美枝

代表

グローバルコミュニケーション学群 准教授

「草の根」として親しまれてきた「桜美林・草の根国際理解教育支援プロジェクト」も、2017 年度で設立 20 周年を迎えました。故人となってしまいましたが、上山民栄、高橋順一両先生（元国際学部教授）を中心とした桜美林学園の中学・高校、大学の教員有志で結成された小さなプロジェクトが、20 年もの長きにわたり活動を続けることができたのも、大学本部をはじめ、プロジェクトの運営に関わってくださった先生方、留学生を含む学生スタッフ、そして多くの教育現場、地域の社会活動の現場の皆様のご多大なご理解とご支援があったからこそ心から感謝申し上げます。

この 20 年間で草の根を取り巻く環境や社会状況は大きく変化してきました。最も大きな変化は、教育現場における国際理解教育の位置

づけの変化ではないかと思います。草の根プロジェクト設立当初は、2002 年に導入予定であった「総合的な学習の時間」の中に国際理解教育が位置づけられており、そもそも国際理解とは何か、教育の現場でどう対応すればいいかの枠組みを探るところからスタートしました。それが徐々に英語教育を中心としたコミュニケーション力の養成、サービスラーニングやアクティブラーニングの導入といった教育方法の変化、外国人定住者の増加による多文化社会への社会構造の変化などに伴い、国際理解教育の位置づけは大きく変化してきたと言えます。今は 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて異文化をどう受け入れ、日本をどうアピールするかに重点が置かれているように思います。日本を取り巻く国際的な環境も、世界



忠生教室棟（旧忠生ゼミハウス）にあった事務室
（2000 年～ 2005 年）



忠生教室棟（旧忠生ゼミハウス）時代の実物資料保管室



国際ワークショップ「本当のアメリカを教えるために」（1997年11月23・24日）で講演する元代表・上山民栄先生



グローバルフェスタ JAPAN2005（2005年10月2日）でワークショップを行う前代表・高橋順一先生

規模で立ち向かわなければいけない問題がますます増える中、お互いを受容するどころか、逆に他者を受け入れない排他的な動きが強くなっています。

その中で、草の根プロジェクト発足当初から掲げてきた「相手を受け入れ、個人として理解する」という基本概念と、それをどう育てていくかが今後さらに重要になってくると思っています。相手を理解するためには、まず相手の話をよく聴き、すぐに良し悪しを判断するのではなく、一旦自分の中に留め温めることが必要です。相手に対しても、自分の考えをきちんと言語化し伝える必要があります。伝わらなかつたら相手とじっくり話をする忍耐力も必要です。そうすることによって、自然とその人が持つ自分とは違う部分が見え、相手を尊重する気持ち

が芽生えるはずですが、自分と異なる存在としてその人を捉えることができるようになる。それこそが真の国際理解教育と言えるのではないかと思います。

草の根プロジェクトは20年間それを伝えるために様々な活動を行ってきました。この20年の間に蓄積した経験知によって、運営面だけでなく活動方法も洗練化され、活動地域、活動組織や団体、活動の種類や内容ともに多岐にわたるようになったことは、本年報をご覧になってもお分かりいただけると思います。小さな種がやがて芽を出し根を張り強固な地盤を作るように、草の根プロジェクトはこれからも小さな種を撒き続けていきたいと考えています。



其中館 301 室の本プロジェクト事務室（2005年～現在）

学生の学びと変容を促す 草の根プロジェクトの「ヒトづくり」

清水 貴恵

エドゥケーター

リベラルアーツ学群 講師

岩本 貴永

アウトリーチ教育コーディネーター兼

エドゥケーター

1 はじめに

1997年6月、桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトは、町田・相模原地域に根ざした教育・研究活動を目指し、数名の教員有志によって活動を始めた。2017年度、20周年という節目の年を終えた。これまで連携・協力してくださった学校教育や社会教育をはじめとした現場の皆様、さまざまなかたちで本プロジェクトの運営を支えてくださった皆様、そして共に活動してくれた多くの学生（卒業生）の皆さんへ、心より感謝を申し上げます。

これまで積み重ねてきたアウトリーチ教育プログラムは1137件、これらの実践を通じて学内外の教育現場を訪ねた学生はのべ2227名（留学生のみ）となった。また、本プロジェクトが所有する世界各地の実物資料（物的リソース「モノ」）は、現在約3000点を数える。

教職員と学生スタッフが、豊富な実物資料とそれを活用したアウトリーチ教育プログラムで

多様な教育現場と連携することにより、学内外、年齢を問わず多くの人々が本プロジェクトを通じて学んでいる。多くの見学者を受け入れられる施設こそ構えていないが、要望を受けた各教育現場にヒトやモノとの関わりを通して学びを届けるアウトリーチ型の「博物館」といえるだろう。

6～29ページの報告の通り、2017年度も多くの現場の依頼に応え、それぞれの目的や対象（学習者）などにあわせたアウトリーチ教育活動を行った。いずれの現場においても、学習者は多様であり、その楽しみ方（学び方）もそれぞれである。このように、学習者の多様性、そしてアウトリーチ教育プログラムによる教育活動の多様性を認識することで、筆者らは実物資料のハンズオン展示による出張博物館をはじめ、体験重視の学習活動を企画・実施する本プロジェクトのユニバーサル・ミュージアムとしての可能性を見出している。

そこで、多様な人と学びに携わる「生涯学習支援」という考えのもと、多くの人々が楽しみ、

それぞれに学びがもたらされる「ユニバーサル・ミュージアム」をアウトリーチ教育プログラムの実践における一つの方針として捉えることとした。学内外のより多く多様な人々の学びの支援の一助となるには、本プロジェクトは、どうあればよいか。

こうした問題意識のもと、特に近年は人々の学びに携わっているのだという「学習支援者」という認識と「生涯学習」という考え方を、プロジェクトの教職員・学生一同が共有し、活動するよう日々心がけてきた。人や学びの多様性を理解している者は、誰かを支える側になったときに、相手が何を望んでいるか真に理解しようと耳を傾け、その人のためにできる最善を模索し、知恵や力を尽くそうとする。正解のない課題に取り組むこのような過程は、まさに人としての学びであると考えている。つまり、学習支援者は同時に学習者でもあるということが言えるだろう。学習支援者に求められることは、絶えず振り返り、学び育つことを自らに促す資質・能力ではないだろうか。

そうした資質・能力を育成するために必要な努力や工夫はどのようなことか。具体的にできることは何か。そのように考えたとき、筆者らエドゥケーターのあり方、そして、留学生・日本人学生の役割、彼らの指導・支援のしかたなど、人的リソースの開発（人材育成）に着目するようになった。筆者らエドゥケーターと共に活動する学生は、学習者と知をつなげる役割を担っている。

本プロジェクトがあらゆる人に開かれたユニバーサル・ミュージアムという役割を果たすには、人的リソース「ヒト」の存在が不可欠である。その具体的な人材育成の取り組みのひとつに、昨年度から始めた「やさしい日本語」¹によるコミュニケーションの導入がある。そこで、本稿では本プロジェクトの教育活動の現場で活動するスタッフ（日本人学生および留学生）の育成に焦点をあてて、2017年度の取り組みを報告したい。今年度の取り組み内容とその成果・課題についても、学生たちの振り返りの声も交えながら報告する。

2 日本人学生の活動

まず、日本人学生の育成については、「やさしい日本語」によるファシリテーションをとりあげる。これはユニバーサル・ミュージアムという考え方のもと、2016年度より全学生が一人となり、共通課題として取り組んでいるものである。言葉を軸に、自らの「伝え方」や学習者（主に小学生）との関わりを見つめ、よりよいものにしていくことをアウトリーチ教育プログラム現場における課題として、日本人学生を中心に力を入れて指導している。前年度の反省を活かし、「やさしい日本語」がどのようなものかを掘り下げ、具体的な考え方や仕組みなどを指導し、年間を通して研修した。

日本人学生は出張博物館でのスタッフ体験を経て、草のプロジェクトの学生スタッフとなる。本プロジェクトの理念や方針、学生スタッフの役割などについての研修を受け、本格的にアウトリーチ教育活動に参加する。ワークショップ型のプログラムは出張博物館とは異なり、クラスとして学習者が事前に設定されている。本プロジェクトでは、依頼者（現場）の要請に沿った学習目標（ねらい）を立て、それにもとづきプログラム・ファシリテーション・環境からワークショップを企画する。このような学習デザインはエドゥケーターの役割である。

学生スタッフは、まず、エドゥケーターから基本的な情報（実施日時・現場・学習者など）と、ワークショップのねらいや意味、構成するアクティビティの意図などの説明を受ける。そのうえで、自身が果たす役割とその意義を理解する。

次に、実際にどう働きかけるのか、ファシリテーションデザインの作業に入る。具体的には、話す内容や動作、立ち位置や動線、実物資料の扱いなど、パフォーマンスの内容である。このファシリテーションデザインはペアやグループで取り組み、相互に発表し、意見交換を行う。また、発表はビデオに記録して全体で確認する。このように、主観的な振り返り（自身の感想）だけでなく、立場の異なる他者の視点や動画記

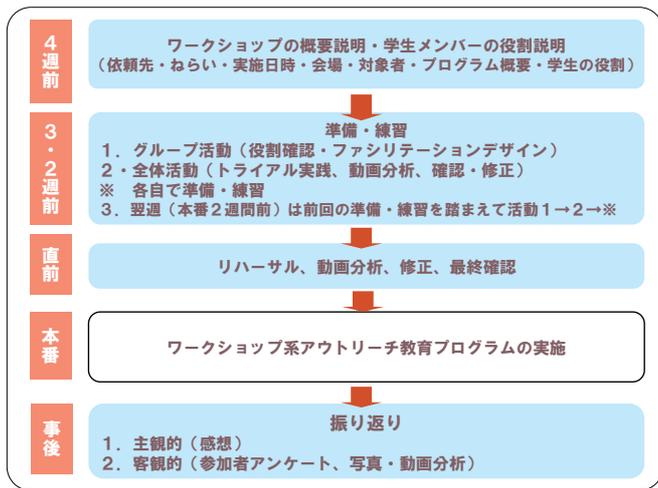


図1 ワークショップ実施までの研修



図2 日本人学生のワークショップの振り返り

評価	インタラクティブに伝えよう	評価	「やさしい日本語」で伝えよう
	「伝わるかな」ではなく「伝える」という気持ち		具体的で、すぐわかる語彙・表現を使う …抽象的・専門的・日常的な頻度が低い 語彙・表現・複合名詞や複合動詞など
	視線・目配り		一文一語…1つの文には1つの情報 短くシンプルな構文で表現する例)「～で、 で…」 →長々とつなげない 「～なんだけど。」 →文末に注意
	表情 (明朗快活、その場に応じた表情)		
	姿勢・体勢		
	身ぶり手ぶり、ジェスチャー		動作の主体を統一させる 例)「やっで、もらいたい、と思います」 こども 私 私 私 →こどもがやるのだから「やります」
	声の大きさ		
	はっきり明確な話し方		例)「これから説明を聞いてもらいます」 →いま説明するのだから「説明します」
	話す速さ (子どもが考えながら聴けるように)		
	めりはりのある話し方		
	問の取り方 (子どもが反応できるような問)		最も大切なこと・ポイントを初めに伝える (結論→説明・具体例→確認)
	子どもたちへの反応 例)うなづき・あいづち・沈黙・待ち		(小学生の)話し言葉+丁寧さ ※漢語・敬語・かたい語彙・表現、 くだけすぎた語彙・表現などを使わない

図3 ファシリテーター自己評価・他者評価チェックリスト

国籍	春	秋	所属	春	秋
韓国	1	1	学群	5 (LA3 BM2)	8 (LA4 BM4)
中国	2	2		交換留学	
台湾	1	1	留学生別科	2	
モンゴル	1	2	計	7	9
ベトナム	2	1			
マレーシア		1			
アメリカ		1			
計	7	9			
性別	春	秋	活動歴	春	秋
男	3	4	はじめて	4	1
女	4	5	2学期目	2	4
計	7	9	3, 4学期目		1・0
			5, 6学期目	1・0	0・1
			7, 8学期目		1・0
			計	7	9

図4 留学生の背景

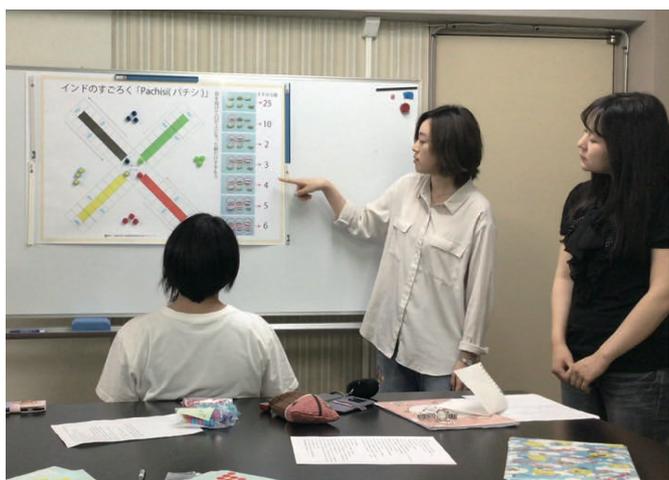
録を取り入れて客観的に自己検証し、修正・試行を重ねていく。この作業には約3週間を要し、学生はミーティング (週1回1コマ90分) の時間以外にも個人およびペア・グループで自主的に練習に励んでいる。

ワークショップのねらいや意図を理解しても、具体的に活動をかたちにするために「表現して伝える」ことができなければ、ファシリテーターは自身の役割を果たせず、学びづくりを実現することはできない。そのため、ファシリテーション (学習者や環境への働きかけ) を考えるうえで、「コミュニケーション」とは何なのかを真に理解している必要がある。そして、実際にパフォーマンスとしてコミュニケーションの方法やスキルを駆使する力がファシリテーターには求められる。本プロジェクトではそのように考え、コミュニケーションについての研修を

行っている。

まず、言語 (語彙・表現・文など) がコミュニケーションの手段であることは、誰にでも分かる。ただ、子どもにふさわしい言語表現で伝えることは、学生にとっては想像以上に難しく、すぐにできることではない。さらに、「やさしい日本語」となれば、なおさらのことである。このような学生の実情から、はじめに「やさしい日本語」とは何か、その特徴とルールなどを導入する。それから、対象の子どもや現場にあわせた言語表現や工夫・注意を具体的に指導していく。

コミュニケーション全体の約7割は非言語によるものである。そのため、非言語コミュニケーションにも意識を向け、効果的に活用することが必要となってくる。このことを学んだ学生は、表情に注意を払ったり、身振り手振りを工夫し



日本人学生のワークショップに向けた練習



留学生のワークショップに向けたミーティング

たりするなどの非言語表現も大事にするようになる。

ワークショップを終えた直後のミーティングでは、振り返りを行う(図2)。まずは、自分たちの感想を口頭や付箋などで自由に出し合う。ワークショップの写真や動画の記録を見て、客観的に自分たちや子どもたちの様子を検証する。アンケートがある場合はそれも振り返りの材料とする。動画を見る際は、ファシリテーション、すなわち、言語・非言語両面のコミュニケーションに注目し、チェックリスト(図3)に沿った自己評価を行う。また、他のスタッフのよい点や参考になる点などを見つけて互いに伝え合う。自己・他者評価などは毎回ワークシートに残しており、エドゥケーターが全員分をコピーし、翌週のミーティングで配布している。全員の振り返り記録を学生は各自ファイルに保存す

る。振り返りを次の活動につなげようというのが、このポートフォリオ活動の目的である。このような自己・他者評価を1年間積み重ねた。

3 留学生の活動

留学生については自己省察の取り組みを報告したい。自身が参加したアウトリーチ教育実施後と学期終了時に、それぞれの活動と自分自身を振り返る作業を行っている。これはプロジェクト発足以来20年にわたって続けている取り組みである。前述のとおり、留学生は母国の情報伝達のツールにとどまらない。彼らの経験や考え、個々の人間力などが存分に活かされて初めて、生きた異文化間教育の場が創造される。彼らの内面が非常に重要なポイントだと考えている。そのため、自己・他者・相互による振り返りは有効である。

本プロジェクトでは、日本人学生も留学生も学期を通して活動することを基本としている。本プロジェクトの教育プログラムは、エドゥケーターが学生スタッフを十分に理解し、個々の特長を存分に活かしたプログラムデザインを行うためである。また、エドゥケーターと学生、学生間の協働により、企画から実施までを取り組むためでもある。

図4は、2017年度の留学生の背景の一部をまとめたものである。今年度も学群留学生は通年で活動した。また、別科から学群へ編入した学生も1年間継続した。ここ数年は学群生や別科生で主に構成されている。彼らのほとんどは、卒業・修了までの4年間、ないし1・2年間、継続して活動している。

留学生には毎学期末に振り返りアンケートを実施している。その際、継続している留学生がプロジェクトへの参加理由として挙げたことは、「楽しい」「もっと現場で活動したい」「まだ自分が頑張れることはたくさんある」「母国の発信をもっとしたい」「卒業まで続けたい」「同じメンバーでまた活動したい」といったことであった。具体的に「楽しい」とは、前の学期に始めて活動の楽しさを実感したこと、メンバー

春	秋	草の根プロジェクト加入の理由・動機（複数選択可）
5	4	やっている人（友だちや先輩など）がすすめてくれて、活動に興味を持った。
2	2	友だちや先輩がやるから、自分も一緒にやろうと思った。
2	3	子どもが好きだから。日本の子どもと交流してみたかった。
1		将来先生になりたい（または教育に関心がある）から。教育に関係する活動をしてみたかった。
3		日本の学校に行ってみたかった。
2	4	自分の国のことを日本の子どもに伝えたいと思った。
4	7	ちがう国や所属の留学生と友だちになったり交流したりしたいと思った。
3	5	授業以外で日本語を使いたい。授業以外でも日本語や日本のことを学びたいと思った。
2	4	授業以外に何ががんばることをしたいと思った。
3	6	人や社会の役に立ちたい。社会活動やボランティア活動をしたかった。
		母国の大学でサービスマーケティングが必修だから。

図5 本プロジェクト加入の理由・動機

春	秋	満足の理由（複数選択可）	
5	6	日本の子どもと交流できたから	日本・日本語
3	6	日本の学校に行くことができたから	
4	5	日本語をたくさん使えたから	
4	6	日本語や日本のこと（文化・学校や教育・子どもや親や先生など）を知ることができたから	自文化
6	7	自分の国のことを日本の子どもたちに伝えることができたから	
4	6	自分の国のことを考えたり、気づいたりすることができたから	自分
3	4	自分のよいことがわかったり、得意なことを活かしたりして、自信が持てたから	
4	6	ちがう国や所属の留学生と友だちになれて交流したり協力したりできたから	異文化
6	8	ほかの国のことや文化について知ることができたから	
4	5	授業以外にがんばる活動ができたから	学び・学び方
3	7	社会活動やボランティア活動ができたから	
5	2	人や社会や学校教育などの役に立てた（ような気がする）から	
3	4	日本の地域社会に参加できた（ような気がする）から	
3	1	サービスマーケティング（社会貢献をして学ぶこと）ができたから	

図6 本プロジェクトの活動に対して満足している理由

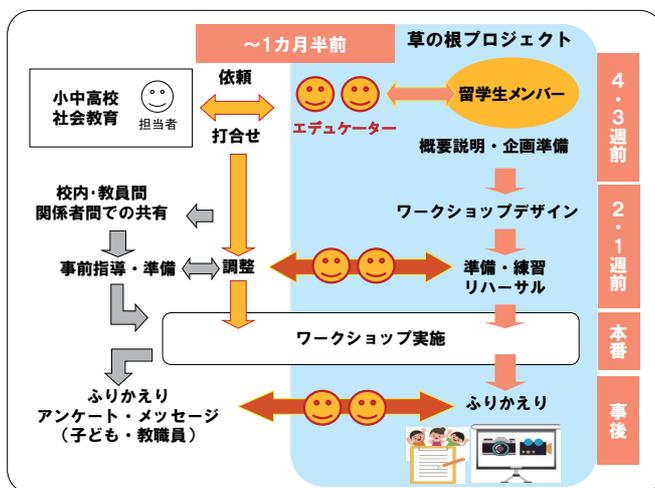


図7 留学生が参加するワークショップ実施までの流れ

問A群 ファシリテーター研修・実践に関する質問

- A-1 ワークショップでワークの説明・遊びの紹介・デモンストレーションなどの役割を担ったことについて
- A-2 ワークショップの事前・事後研修（ミーティング）で映像を用いた自己検証、自己/ピア評価など客観的な振り返りにとりにくんだことについて
- A-3 コミュニケーション（言語・非言語）を学び、実践したことについて
- A-4 「やさしい日本語」を学び実践したことについて

図8 日本人学生を対象としたアンケートの質問（A群）

との交流に楽しさを感じていることなどが述べられていた。

アンケートでは、1学期間に対する満足度（5段階評価）を問う項目もあり、今年度の結果は平均4.6であった。この結果は20年間それほど変わっていない。その理由は図6の通りである。プロジェクトに入る理由・動機（期待感）に呼応していることがわかる。さらに、彼らが当初考えていた以上の収穫が活動を通して得られたと感じているであろうこともうかがえる。

それでは、留学生はどのような活動を日々行っているのかを簡単に紹介する。まず、本プロジェクトに関心を持った留学生は、各学期初めのミーティングに参加し、本プロジェクトの活動理念・方針、留学生の役割について理解を共有する。新しく加入する留学生は、すでにスタッフとして活動している留学生の友人や先

輩・後輩である場合が多く、具体的な体験談を伝え聞いている。そのため、新メンバーの多くはミーティングに参加する段階で加入の意思を固めている傾向にある。その後、スタッフ間での相互理解を進めながら、学校/社会教育でのワークショップに向けたミーティング活動に入っていく。

まず、ワークショップ実施の1カ月半ほど前までに依頼元の担当者が来室し、エドゥケーターとの打ち合せを行う。エドゥケーターは、先方の学習活動のねらい、対象児童生徒の実態などを十分にヒアリングし、留学生の特徴やスケジュールなどと照らし合わせながら活動案を考える。その活動案をもとに、留学生とのミーティング（週1回1コマ90分）で共にワークショップデザインを行う。図7はその流れを表したものである。

問B群 自己の変容を見つめる質問

- B-1 人の学びやその支援に関して
- B-2 国際／異文化理解に関して
- B-3 桜美林大学・草の根プロジェクトの一員として
- B-4 一人の人間（学び育つ個人）として
- B-5 1～4以外について【自由記述】
- B-6 自身の目標・課題、その方策について【記述】
- B-7 そのほか感想・意見・提案、伝えたいこと【自由記述】

図9 日本人学生を対象としたアンケートの質問（B群）

「B-1」の記述内容（一部）

- ・「学び続けることが大切だということ、振り返りをする大切さを知った。」
- ・「自己分析をする機会が他の場ではなかったが、自分を見つめなおす機会として、とても楽しかった。」
- ・「人の学びに自分が関わることはとても大きなことであるが、そのことに対する責任も少し高まった。プロジェクトに対する意識が上がったことが理由として挙げられる。」
- ・「支援する立場に立つことで、刺激を受け、新たな発見ができた。」
- ・「人が学ぶお手伝いができて、とても楽しかったし、自分も子どもたちから学ぶことができて、今後もこのような活動を続けていきたいと思った。」
- ・「人が学ぶ姿を見るのが好きだと気づいた。」

図11 B-1の記述内容（一部）

日本人学生が参加するワークショップのデザインと同様に、基本的なプログラムづくりはエドゥケーターが担当している。大まかな構成案を共有すると、留学生からもアイデアが出され、具体的なアクティビティの内容や方法、役割など、プログラム・ファシリテーション・環境のデザインを進めていく。

ワークショップ実施後のミーティングでは、必ず振り返りを行う。ここでも、自分たちの感想の共有にとどまらず、活動時の写真や動画を確認したり、子どもたちのアンケートを読んだりするなどして、客観的に振り返っている。

学期中は常にこのサイクルでミーティング活動が進行するが、多い時には月に4件ワークショップを実施する場合もある。ワークショップ実施前の約1カ月間は、留学生間、そして、留学生とエドゥケーターとの協働の期間と言え

回答数	「B-1人の学びやその支援に関して」の選択肢
7/8	人が学ぶということへの興味・関心が高まった
7/8	自分自身の学習観（学びに対する考え方・価値観）や行動などに変容があった
8/8	人の学びを支援することへの興味・関心が高まった

回答数	「B-4一人の人間（学び育つ個人）として」の選択肢
6/8	自分自身に対する気づきを得た
6/8	感情（感じ方）・思考（考え方・ものの見方）などに変容があった

図10 B-1 および4の選択肢と回答結果

回答数	「B-3桜美林大学・草の根プロジェクトの一員として」の選択肢
8/8	桜美林大学生としての意識・誇りが強くなった
8/8	草の根プロジェクトの一員としての意識・誇り・やりがいなどが強くなった
6/8	地域社会への参加・貢献に対する意識に変容があった

図12 B-3の選択肢と回答数

る。このような過程を経ることで、ワークショップ本番にはチームワークが出来上がっている。学期を通じたこのような活動の積み重ねがさらに相互理解を深め、協働性を高める。

4 「ヒトづくり」からみるプロジェクトの可能性を考える

日本人学生および留学生の変容に注目し、本プロジェクトのユニバーサル・ミュージアムとしての可能性を考える。その材料として、学生の声（学期末に実施した振り返りアンケートの結果）を扱う。より多様な人々の学びづくりにつながるよう、本プロジェクトの人的リソースの開発「ヒトづくり」、すなわち、人材育成の課題と今後の方策を見出したい。

問B-4の記述内容（一部）

- ・「振り返りを通して自分を見つめなおせた。」
- ・「発表に対する意識（捉え方）が変わった。以前は「嫌だな」と思っていたが、今では「やりたい」と思っている。これが自分の中で一番大きな変化だった。」
- ・「ビデオの振り返りで自分を客観的に見ることで、改めるべき点を確認できた。」
- ・「以前は人とのコミュニケーションがうまくいかないことが多かったが、相手の目線で考える方法を実践し、だんだん会話ができるようになった。」

図 13 B-4 の記述内容

春	秋	参加を通じた自身の変容・発見や気づき（複数選択可）	
3	3	「日本語をもっと勉強しよう!」「日本語をもっとコミュニケーションしたい!」日本語学習や日本語コミュニケーションの気持ちが強くなった、自信がついた	日本・日本語
4	4	「日本のことをもっと知りたい!」「日本のことをもっと勉強したい!」日本のことについて勉強する気持ちが強くなった	日本・日本語
1	5	「私の国はすばらしい!」母国や自文化への誇り、気づき、関心	自文化
2	4	「私は●●人なんだ」「私はこういうことを考えているんだ」アイデンティティや自分に対する気づき	自文化
6	6	「異文化は面白い!」日本以外の人、国や地域、世界への関心が強くなった	異文化・コミュニケーション
4	6	いろいろな人（国・言葉・所属がちがう留学生や先生、子どもや学校の先生）と交流したり、協力したりすることは楽しいな!	異文化・コミュニケーション
5	4	「コミュニケーションは言葉だけじゃない!コミュニケーションは面白い!」コミュニケーションの勉強になった	異文化・コミュニケーション
3	6	「文化は見えるものや伝統文化だけじゃない!見えない文化も文化だ!毎日の生活のなかにも文化はある!」文化の勉強になった	異文化・コミュニケーション
4	3	外国人だけど、留学生だけど、日本の学校や地域の役にたてるんだ!	市民
5	5	授業以外でもいろいろなことを学ぶことができるんだ!	学び
4	3	授業以外に何かをがんばることは楽しいな!	学び

図 15 R-4 の選択肢と回答数

問R郡 留学生への質問

- R-1 なぜ、この活動に参加しましたか？
- R-2 この活動に参加してどうでしたか？
- R-3 どのフィールドワーク（学校訪問やワークショップ）がよかったですか。その理由も書いてください。
- R-4 この活動に参加して、あなたは変わりましたか？何か考えましたか。何か発見したことや気づいたことは、ありますか。

図 14 留学生を対象としたアンケートの質問（問 R 郡）

多様な人・現場とのつながり

- ・子どもだけでなく、その両親たちとも交流できました。
【小学生WS @子ども会】
- ・（省略）高校生たちの協力を受けながら、順調に進められました。
- ・（省略）高校生にワークショップをやるのは新鮮でした。
- ・日本の高校生と話ができるのはすごく少ないから、いい経験になりました。
【高校生WS@授業】
- ・全然知らない地域で活動するのは初めてで新鮮に思いました。
【小中高生WS@自治体講座】
- ・日本人（日本人学生メンバーや見学の保護者など）がいっぱいいて切迫した空気を感じました。（省略）
【小学生WS@プロジェクト主催クラス】
- ・いろんな人と交流できてよかったですと思います。（省略）
【出張博物館@地域イベント】
- ・（省略）子どもだけではなく、親も楽しく遊んでいたの、うれしかったです。
【出張博物館@地域イベント】

図 16 R-3 フィールドワークに参加した感想

4.1 日本人学生の振り返り

学期末（2018年1月）に1年間を振り返るアンケートを全スタッフ8名に実施した。質問は図8・9のように大きく2つのカテゴリー（A・B群）に分け、選択式の間を計10問設定した。これらの間については選択した回答の理由や詳細を記述する方法をとった。また、学生が自由に思いや考えを述べられるよう、自由記述の項目も設定した（B群問7、以下B-7のように表記）。

はじめに、A-2より「写真・動画記録を用いた自己省察や相互評価を行う事前・事後研修（ミーティング）について」、同問4「『やさしい日本語』を学んでワークショップで実践した

ことについて」の感想・意見に注目してみる。

客観的な自己省察の姿勢・姿勢を育てるための事前・事後研修に対して、全体的に肯定的な感想を持っていることがわかった。一方で、当初はビデオ記録に対する抵抗や嫌悪感があったことも示された。ただ、研修を進めるなかで、その意味を理解し、肯定的な考えへと変化していったことが記されていた。学生は自分なりに納得して取り組んでいたことが理解できた。また、与えられた役割や使命として取り組んだだけでなく、彼らはこの研修を一個人としても自分の事として受け止めていたのではないかと思われる。アンケートには、この研修に関連し、自身の変容や成長を認識している記述が点在している。自己省察の研修は、学生それぞれにプラスの影響を与えていたと思われる。

「やさしい日本語」研修・実践についても同じような結果が見られた。今日、「やさしい日本語」を導入する自治体は徐々に増えつつあるものの、博物館のような生涯学習施設での取り組みは見られない。また、現在の博物館学芸員養成においても「やさしい日本語」について学ぶことはない。このような現状で、本プロジェクトの日本人学生にとっても「やさしい日本語」は身近でないことは言うまでもない。その必要性は分かっても、概念や仕組みの理解と実践には大変な苦勞があったと推察できる。それでも、自分には無関係で不必要であると拒否せず、前向きに取り組んでいた姿が印象的である。

そのような意思や態度はどこから生じたのか考えたとき、自己の思考や行動の変容を問うB-1「人の学びやその支援について」およびB-3の一人の人間（学び育つ存在）としての振り返りを問う質問の回答結果に注目したい。これらの質問の選択肢と選択した回答者数は図10のとおりである。さらに図11ではB-1の回答に付随した記述のうち興味深い内容をまとめた。これらの記述からは、本プロジェクトという学習支援のための集団（博物館）の一員、学習支援者としての自覚が育ったことがうかがえる。実際に、B-3「桜美林大学・本プロジェクトの一員として」の回答結果を図12で見ると、本プロジェクトへの参加を通じて桜美林大学生、本プロジェクトのアイデンティティを強めていること分かる。また、「振り返りをすることで、より意識・自覚・やりがいが強くなった。」と記述している者もいた。また、B-4では図13のような自己変容や成長を認識する内容の記述がみられた。

4.2 留学生の振り返り

各学期末のミーティングに実施した振り返りのアンケートの結果から、留学生の変容を探る。アンケートの言語は「やさしい日本語」を使用し、必要に応じて補足説明をしたり英語で支援したりするようにしている。質問内容は、図14の通りである。問3（以下R-3のように表記）

のみ記述式、そのほかは選択式とした。選択式の間については、自由な感想や意見、提案やエディケーターへ伝えたいことなども述べられるよう自由記述欄も設けた。

R-1、R-2は、既に触れたので、ここではR-3「ワークショップを初めとしたアウトリーチ教育活動の感想」と、R-4「自己変容」を問う質問の結果を挙げる。紙幅の都合上、R-3のコメントをすべて扱うことはできないので、自己省察という観点で焦点をしぼる。

R-4は、「この活動に参加して、あなたは変わりましたか。何か考えましたか。何か発見したことや気づいたことは、ありますか。」と、自己の変容の視点から振り返る質問である（複数回答可）。結果は図15のとおりである。春・秋学期に活動した留学生はのべ16名で、選択数がその過半数であった回答には網掛けをしてある。

注目すべき点は、異文化やコミュニケーションに関する選択肢の選択人数が、すべて半数を超えているということである。自分とは異なる国・言語、所属の留学生が活動の仲間となり、個人ではなく集団で学びづくりのための作業（事前・事後ミーティング、ワークショップ）を行う。その蓄積により、相互に理解・尊重しあう関係が築かれていく。だからこそ、このような視点を持って振り返りがなされるのではないか。

また、図16、17にまとめた結果も注目したい。これは年間を通じて実施したワークショップ、出張博物館において、小学生以外の年齢・年代の人々とも出会い、交流したことに対する感想である。そのほとんどが「うれしかった」「よかった」「新鮮」といった気持ちであるが、なかには「切迫」という正直な心情も記されている（図16）。このように多様な人々・現場とつながることは、彼らの通常の教室授業では経験しがたい生きたコミュニケーションであり、それに伴うリアルな感情体験である。さらに、ワークショップ（クラス）を超えた学習者（主に子どもたち）との心のつながりは、さらに大きく彼らの心に刺激を与えている（図17）。ワーク

心のつながり

- (省略) ワークショップが終わっても、小学生が自己紹介しに来てくれて、胸がいっぱいになりました。
【小学生ワークショップ@学校授業】
- 去年のワークショップで覚えていてくれた子どもが何人かいたので、うれしかったです。
【小学生ワークショップ@学校授業】
- (省略) 子どもたちが積極的に応えたり、話しかけてくれたりして感動しました。(省略) アンケートをちらっと見ましたが、「よくがんばりました。ありがとうございます。」「かんこくにいきたいです。」のようなコメントがあって、嬉しかったです。
【小学生ワークショップ@プロジェクト主催クラス】
- (省略) 小学生たちがすごく興味を持ってくれて嬉しかったです。子どもたちも喜んでくれたからよかったです。アンケートを見て、「大学頑張っってね」と子どもたちのメッセージを貰って、心が強くなりました。
【小学生ワークショップ@学校授業】

図 17 学習者との心のつながり

ショップは計画的に用意された地域の人々との交流の機会・場であるが、そこに彼らとの心の通い合いが生まれることが、今回の留学生の振り返りから分かった。このような感情体験もまた、留学生の「もっと活動したい、続けたい」という意欲を高め、継続の原動力につながっていると考えられる。

そのほかにも改めて確認することができた点として、学習支援者としての視点による自己内省につながるようなしているコメントがあげられる(図 18)。日本人学生と同じように、留学生にも本プロジェクトの一員、学習者の学びを支えるファシリテーターとしての自覚を持って活動していることが感じられる。このような記述は、プロジェクトでの活動歴が1年以上(3学期目～)の経験者によく見られた。ただ、経験が1年に満たなくても、2学期目を終了すると、同様の記述が現れていた。この点については、今回大変興味深く受け止めた。

4.3 本プロジェクトの可能性

日本人学生、および留学生それぞれのアンケートの結果から、彼らの活動や自分自身に対する振り返りを見てきた。両者とも自分自身の取り組みをじっくり見詰め、深く省察していることが分かった。

本プロジェクトは多様な人・学びを支援する開かれた博物館的な存在であり、その学生スタッフである自分たちは学習支援の役割を担っ

学習支援者としての自己省察

- 朝が早いので、留学生同士お互いに起こして、ちゃんと来られるようにしたほうがよかったですと感じました。
- 年齢によって話し方ややり方を変えなければならないということに初めて気づきました。
- こまやけん玉の遊び方をこなすことができなくて、子どもたちに教えるとき、少し焦った気がします。(省略)
- 子どもたちに伝える伝言をうまく説明できなかったです(省略)。
- (省略) もっと余裕を持って教えられたらよかったなあと思いました。(省略) 自分には教える力が足りないと感じました。子どもたちの反応は予想できないので、何かあるとすぐに慌ててしまいます。
- (省略) 怪我した子どもがいて心配しましたが、(省略) 今後のワークショップでは気をつけようと思いました。
- 子どもたちが少し騒いだ気がしました。しかし、最後まではっきり言わなかった私の責任でもあると思います。(省略)
- (省略) 子どもたちが静かだったので、元気を出させるために、もっと声をかけてあげられたらよかったと思いました。また、どこに立ってクイズの出題をするかなども決められていたら、もっとよくなった気がします。

図 18 学習支援者としての自己省察

ていると認識している。そのような意識の現れだと解釈できる記述が、アンケートの至るところで確認できた。また、彼らは、個としての自分、自己そのものに対するまなざしを持っている。特に、日本人学生は、プロジェクトでの活動を通じた、感情や思考、行動面の変容を認識し、それぞれの言葉で豊かに表現している。

留学生のアンケートにはあまり見られなかったが、それはアンケートが日本語であったことも関係していると思われる。使用言語が日本語でなく、それぞれの母語であれば、もっと深い自己省察が豊かに表現されるかもしれない。ただ、彼らの日々の言動を見ていると、日本人学生と同様に、個として自己を見つめ、その変容を認識しているのではないかと感じられる。

本プロジェクトの人的リソースである学生スタッフは、各種アウトリーチ教育プログラムの意義をさらに高める重要な存在である。彼らの研修は、本プロジェクトのアウトリーチ教育プログラムの向上が大きな目的である。そのため、さまざまな方法を用いて多方面から客観的に自分たちの活動を振り返るよう、その視点や力を育てるようなミーティングを日々行ってきた。しかし、結果的には、学生にとっても個としての成長につながった。また、それを本人たちも受け止めていることが分かった。

このような成長は、人や物事の多様性を真に理解し、異文化間の視点で人や物事を捉える力となるはずである。その力が結集することで、本プロジェクトは、多様な人やその学びを支え



学生スタッフ・エドゥケーター（2017年度春学期）

るユニバーサル・ミュージアムとして一層の成長ができるものとする。

5 おわりに

20年という時はあっという間であった。しかし、この間につながった学内外のさまざまな現場・人々、そこに携わった留学生や日本人学生などの数的データ、各活動のあらましの記録などから、道のりの長さを理解することができる。そのなかで、チエ・ワザを地道に積み重ね、今日に至ったことを再認識する。

そこには、自分たちが思っている以上に、地域とのつながりや各所から寄せられる期待がある。本プロジェクトはこれからもこうした期待に応えるために、発展的に活動を継続していかなければならないことを痛感している。そのような地域社会からの要請に応じていくには、私たち教職員はもちろん、留学生を含む学生スタッフの成長が必要不可欠である。

本プロジェクトを組織・運営する筆者らは、年々入れ替わる学生を指導・支援しつつ、独自の学びづくりに励んでいる。学内外より求められる期待、教育現場や現実社会のニーズに対し、自分たちのシコウ（思考・試行）はマッチしているか。真にひらかれた学びの場・機会を創造し、それを届ける働きをしているか。それらのことに、常に敏感、かつ謙虚であるよう努めなければならないと考えている。つまり、生涯学習支援者としての自己省察である。

本稿では、本プロジェクトの大切な人的リソースでもあり、スタッフとして活動を支える存在でもある留学生・日本人学生それぞれの学びに注目した。彼らのフィルターを通し、取り組みを見つめることは、学生理解を深めるだけでなく、筆者らのシコウ（思考・試行）を検証する手段でもある。それは、自己省察の一材料となる。

2018年度、本プロジェクトは21年目を迎える。新しいステージに進むが、学習者（依頼者・利用者）に寄り添い、耳を傾けながら、「ヒト」「モノ」、そして「チエ・ワザ」の地道な開発に変わらず取り組んでいく。一方で、変容することにも積極的でありたい。変わり続ける社会を見つめ、さまざまな試みに挑戦していきたい。

1 「やさしい日本語」は、日本国内に暮らす外国人（日本語を母語としない人々）にとっても「易しく（わかりやすい）優しい（親切的な）日本語」のことである。阪神・淡路大震災では、日本人だけでなく多くの外国人も被災した。日本語が理解できないことが要因となり、被災してさらに苦しい状況に置かれた滞日外国人が非常に多かったと言われている。このことがきっかけで「やさしい日本語」研究が始まった。現在、「やさしい日本語」は災害時のみならず、平時の情報提供手段としても必要であるという研究もすすめられている。彼らと日本人（日本語母語話者）の共生・協働は不可欠で、両者をつなぐ共通言語が「やさしい日本語」であると考えられている。

参考文献

- 桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト（2013）『草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ』vol.1 1997～2012年度
- 桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト（2017）『草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ』vol.5 2016年度
- 清水貴恵（2015）「社会とつながる留学生のまなび」佐々木倫子ほか『日本語教育の現場から一言を学ぶ／教える場を豊かにする50の実践』pp.241-257 ココ出版

データで振り返る アウトリーチ教育プログラム

1997 年度

草の根プロジェクト 活動開始

大学・中高の教員を中心に、地域の教育関係者とともに国際理解教育の目的、手法等に関する研究会を2000年3月までの間に計11回実施。ヒト、モノを教育リソースとして活用する方法の開発等に取り組む。

1999 年度

留学生の小学校への 訪問を開始

留学生対象の「日本語校外授業」で始まった小学校との交流を起点に、国際学生訪問ワークショッププログラムの原型である「外国学生訪問」が始まった。また博物館学芸員課程の実習と連携して実物資料を用いた「異文化発見キット」の制作を開始。

2001 年度

異文化発見キットの 貸出を開始

「異文化発見キット」の制作、試験的な活用を行った後、2001年4月より主要な支援活動の一つとして広く公開した。同時に、草の根プロジェクトが主体となって実物資料を活用する教育活動を、依頼に応じて行うようになる。

1999年10月1日

相模原市立宮上小学校に
韓国人留学生が2名訪問

2001年5月10日

町田市立藤の台小学校へ最初の
異文化発見キットを貸出

2001年8月28日

町田市国際友情音楽祭において
楽器と民族衣装のハフズ
展示を実施

2003年6月27日

町田市立真光寺中学校で学生
スタッフ2名が実物資料を
用いた出張授業を実施



1997年9月26日 第2回研究会
「プロジェクトの目標：長期的、継続的なものにするために」



1

アウトリーチ教育プログラムの展開

2008 年度

2017 年度

「アウトリーチ教育プログラム」 開始

ここまで継続してきた学内外の教育現場に対する支援の仕組みを「アウトリーチ教育プログラム」と称することに。すでに実施していた留学生の訪問、実物資料の貸出に加え、本プロジェクトの教職員・学生が現場を訪ね、実物資料を活用した教育活動を実施する「国際理解教育出張プログラム」を新しい枠組みで独立させた。

3種類から5種類に拡大

アウトリーチ教育プログラムを5つに再編成。国際理解教育出張プログラムを参加人数と時間を指定するワークショップ形式と入退場自由のハンズオン展示形式（出張博物館）に分割。さらに留学生と学習者のより親密なコミュニケーションを促すことを目的とした異文化協働体験ワークショッププログラムを設けた。

3種類のアウトリーチ教育プログラム

国際学生訪問授業プログラム



国際学生訪問

ワークショッププログラム

異文化発見キット貸出プログラム



異文化発見キット

貸出プログラム

国際理解教育出張プログラム



世界の遊びと衣装の

出張博物館プログラム



世界の実物体験

ワークショッププログラム



2014年6月14日

武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニアにて、実物資料を使用した体験活動によって留学生と子どもたちの協働を促すワークショップを実施

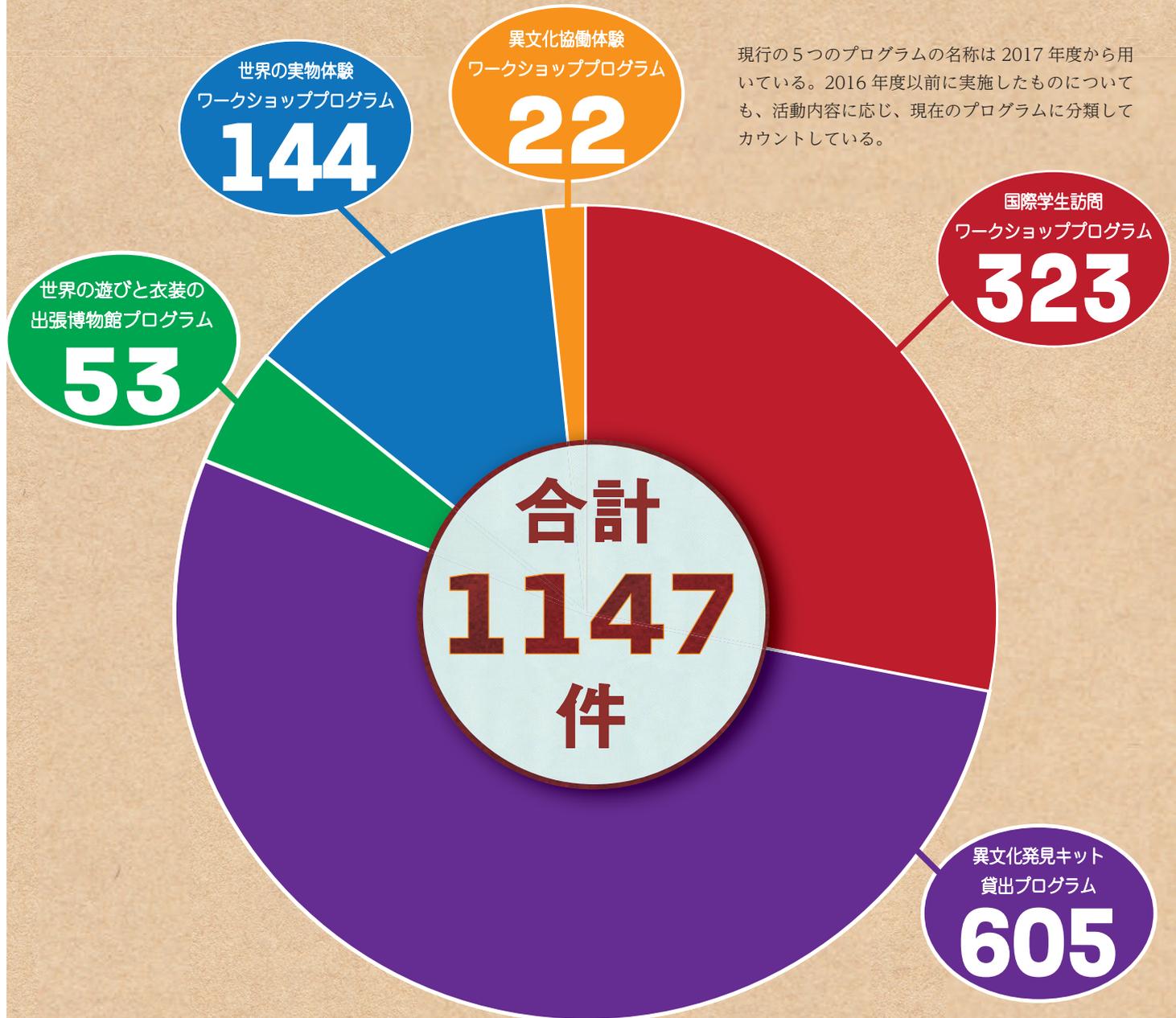


異文化協働体験

ワークショッププログラム

2

アウトリーチ教育プログラムの実施件数は？



現行の5つのプログラムの名称は2017年度から用いている。2016年度以前に実施したものについても、活動内容に応じ、現在のプログラムに分類してカウントしている。

【図1】アウトリーチ教育プログラム別実施件数（1999～2017年度）

現場への訪問と実物資料の貸出はほぼ半々

異文化発見キット貸出プログラム（以下貸出P）の実施件数が最も多く、他の4プログラムを合わせた件数との割合はほぼ1：1である。貸出P以外のアウトリーチ教育プログラムでは、本プロジェクトの教職員・学生が現場を訪問するものであるため、双方のス

ケジュール調整、事前の打ち合わせ、会場の下見等が必要になる。一方、貸出Pはそうした事前の準備にかかる負担が少なく手軽に利用することができるためであると考えられる。

3

プログラム別の実施件数の変化

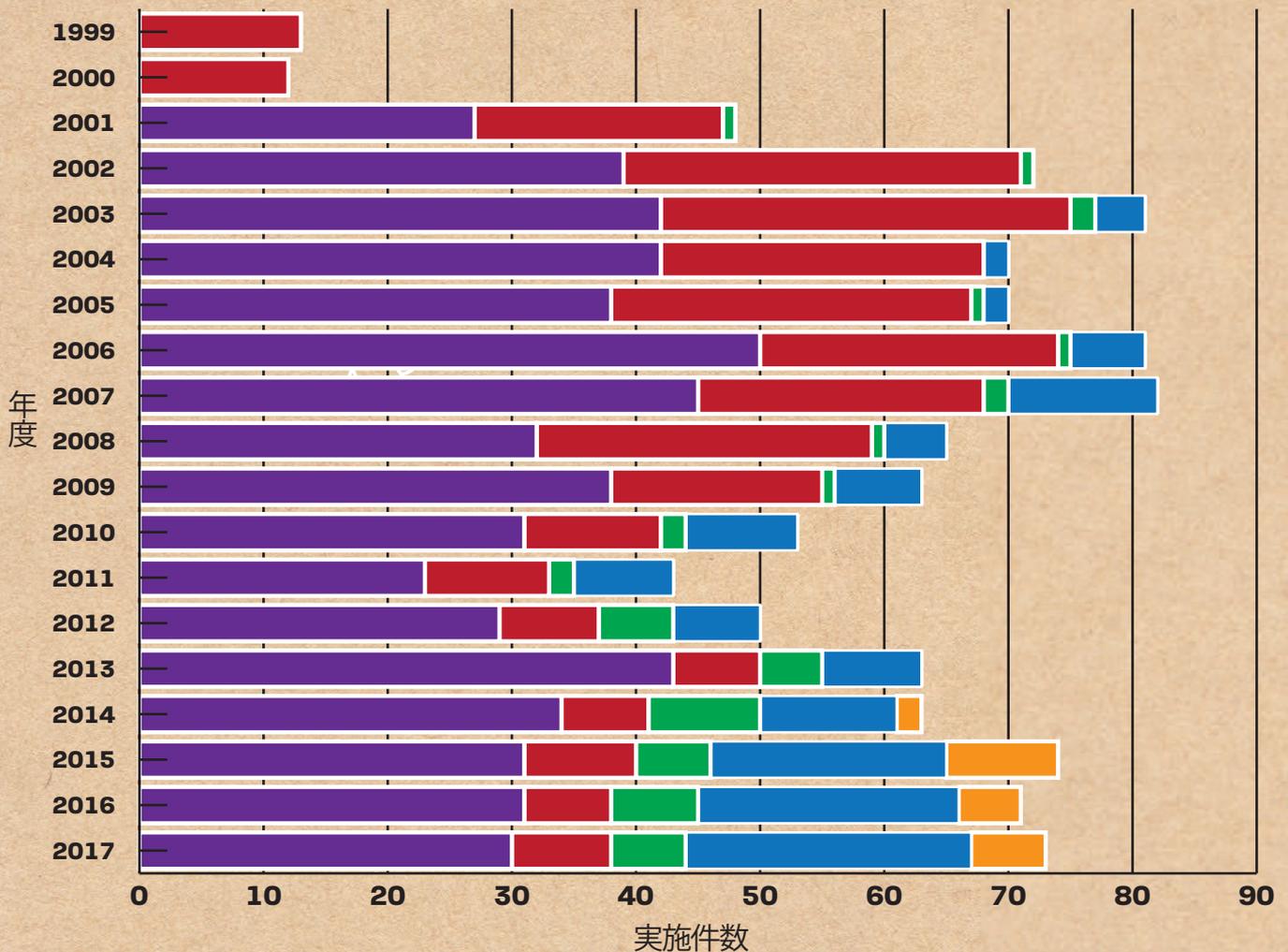
国際学生訪問
ワークショッププログラム

異文化発見キット
貸出プログラム

世界の遊びと衣装の
出張博物館プログラム

世界の実物体験
ワークショッププログラム

異文化協働体験
ワークショッププログラム



【図2】 年度ごとのプログラム別実施件数

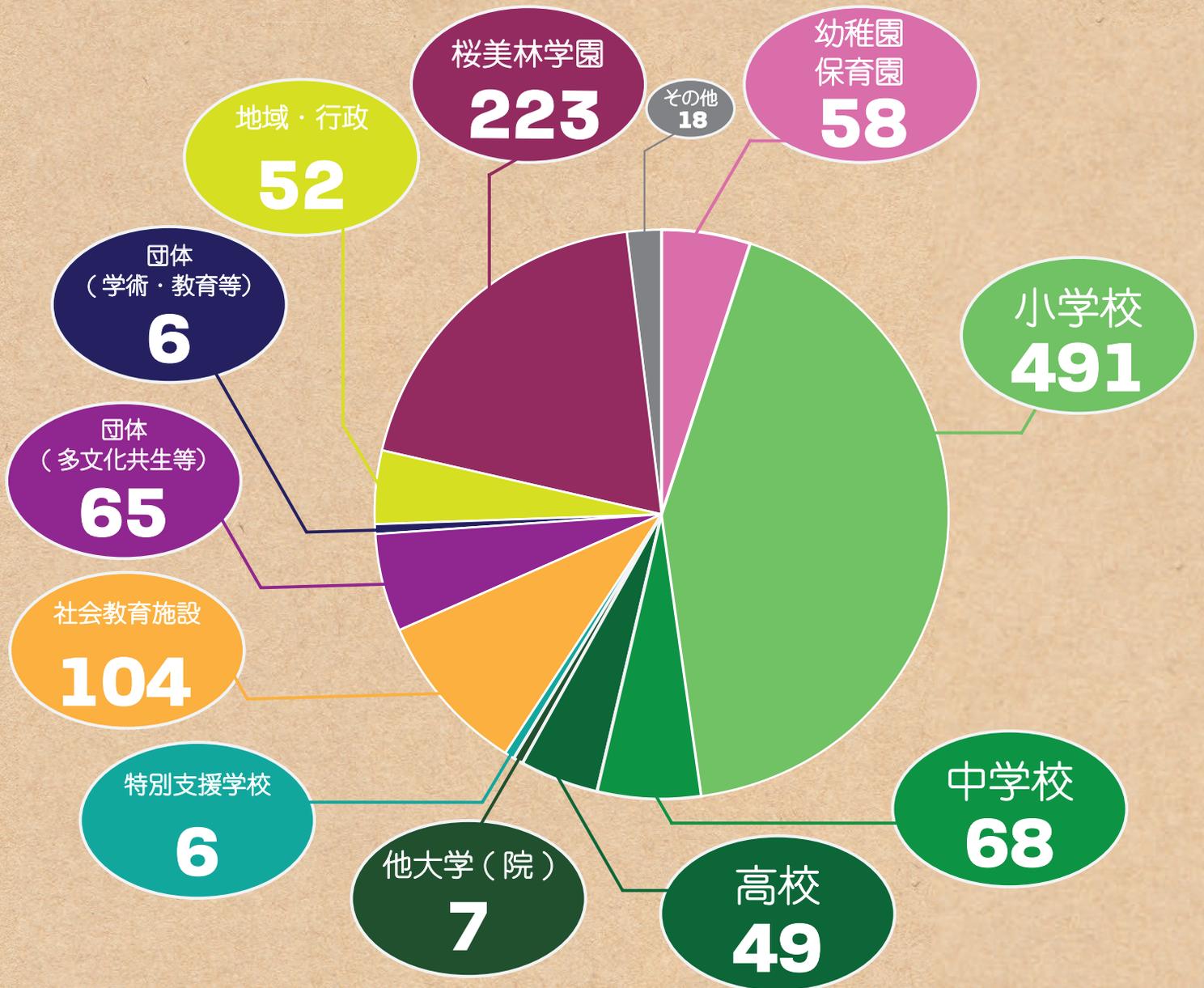
「総合的な学習の時間」が広がりのきっかけ

【図2】は、年度別にアウトリーチ教育プログラムの実施件数を示したものである。年度平均の実施件数は60.4件、これまでで最も多いのは2007年度で82件である。本プロジェクトが支援の主なターゲットと想定していた「総合的な学習の時間」が2002年度

に始まっており、2002～2007年度の6年間で実施件数の第一のピークとなった。その後は減少し、2011年度には総合学習開始後最も少ない42件となるが、再び増加に転じ、2015年度からは3年連続で70件を越えている。

4

アウトリーチ教育プログラムで どのような現場から依頼を受けたり、 連携してきたのか？



【図3】クライアント・連携協力先の種類別実施件数（1999～2017年度）

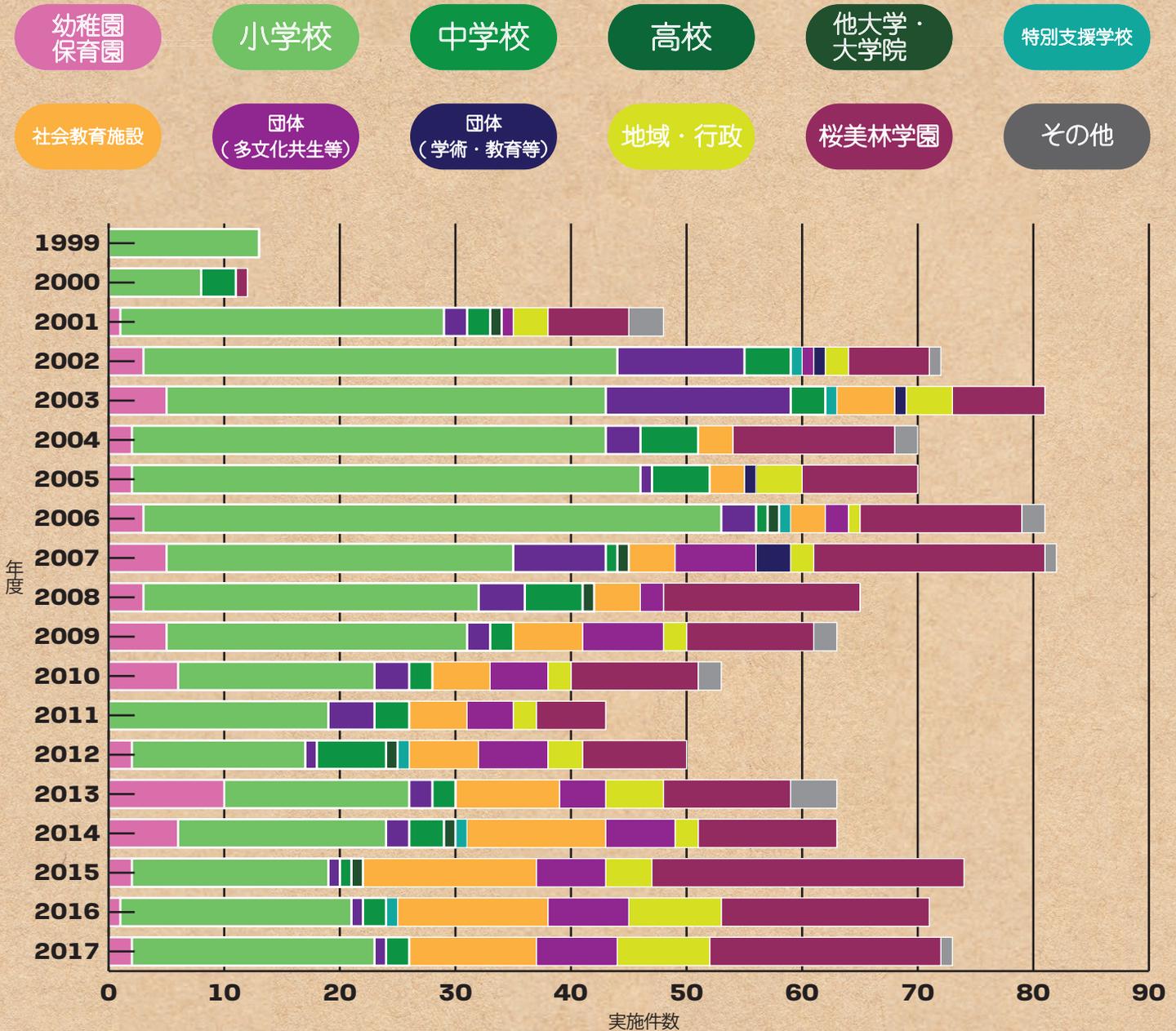
小中学校が実施現場の半数を占める

これまで実施した1147件におけるクライアント・連携協力先を分類し集計したのが図3である。また、図4では年度ごとにクライアント・連携協力先の種類別に実施件数を集計した。これらを見ると分かるように最も多いのは小学校であり、2001年度から2006

年度までは、実施件数の半数を占めた。これは、先述した第一のピークに当たり、小学校におけるニーズの急激な高まりがあったことがわかる。その後はやや落ち着き、代わりに増えたのが「桜美林学園」と「社会教育施設」における利用である。いずれも全体を通じて

5

アウトリーチ教育プログラムのクライアント 連携協力先はどのように変化しているのか？



【図4】 クライアント・連携協力先の種類別異文化発見キット貸出プログラム実施件数

小学校から社会教育施設、桜美林学園へシフト

一定の利用がみられるが、2011年度に実施件数が最小になった後、特に増加しているのがこれらの現場である。桜美林学園における増加の要因は、「ヒト」や「モノ」のリソースを教育目的で活用する本プロジェクトのユニークな事業や、実物資料を活用したワーク

ショップなどを、学内の教員と連携して大学の授業に還元する取り組みが広がり始めたためである。特に博物館学芸員課程や教職課程に関する授業や実習、さらに新入生向けの必修授業では一定の利用が定着している。

6

アウトリーチ教育プログラムで地域の教育現場へ訪問した留学生は？

のべ **2227** 名

出身別の現場への訪問人数 (のべ)

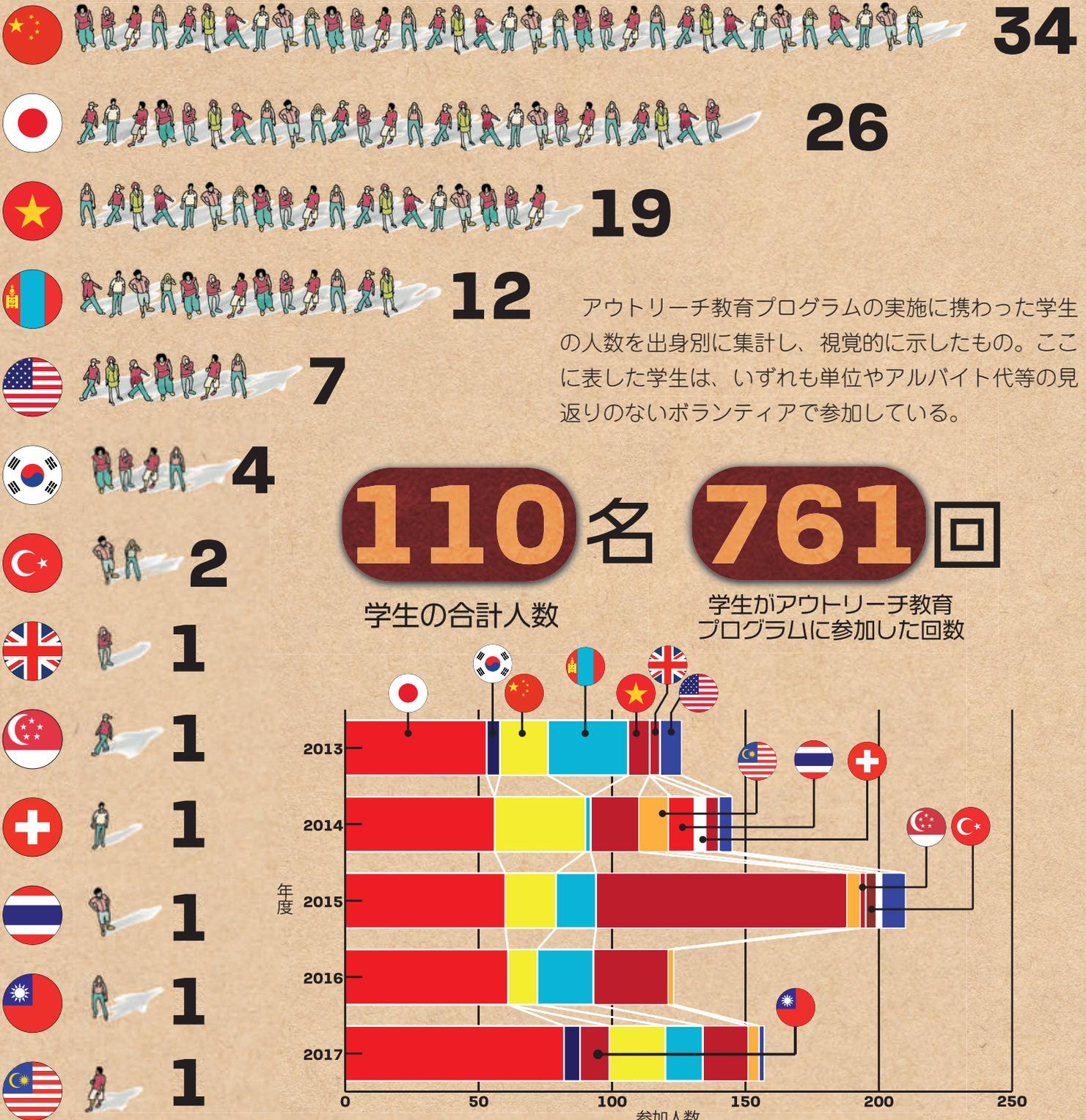


アウトリーチ教育プログラムの現場を訪問した留学生ののべ人数を国籍別にカウントして示した。上位5つは順に中国、アメリカ、韓国、ベトナム、台湾となった。

7

アウトリーチ教育プログラムの実施に 学生がどれくらい携わっているのか？

2013～2017 年度に参加した学生の出身別人数



【図5】 出身別アウトリーチ教育プログラムへの学生の参加回数（2013～2017 年度）

編集後記

20周年記念特集号をお届けできることに、学内外を問わず本プロジェクトとともに教育活動に携わってくださったみなさま、ご支援・ご指導頂いた全てのみなさまに感謝を申し上げます。

原稿の執筆、編集の作業にあたっては、20年に及ぶ本プロジェクトの足跡に改めて思いを致さずにはいられませんでした。発起人であり、最初の代表である故・上山民栄先生が2001年3月に退職されてから約17年、代表を引き継がれた故・高橋順一先生が2009年8月に不慮の病で代表を退かれて約9年が経ちます。地域の教育に心を寄せ、本プロジェクトを導かれたお二人の先生が去られた後、徒手空拳で現場における実践の向上に取り組んでまいりました。幸いなことに、浜田弘明先生が代表代行として2013年度まで、2014年度以降は石塚美枝先生に代表としてご尽力頂くことで、本プロジェクトは本学発の稀有な地域貢献事業として地道に継続・発展し、20周年を迎えることができました。こうしてアウトリーチ教育プログラムの実践を積み重ねる中で、直接関わってきた現場のみなさまから多くの感謝と期待の声を頂いてきました。そうした一つ一つの声によって、本学と地域の結びつきを強化する役割を果たしているということを実感しつつ、より質の高い実践を学内外の現場のみなさまとつくり上げる原動力としてきました。

本プロジェクトに対するニーズはこれからますます高まるものと考えられます。2020年に向けた東京都オリンピック・パラリンピック教育に加え、2022年度以降には、小中高校で順次新しい学習指導要領の全面実施が控えています。そこで掲げられているのが「主体的・対話的で深い学び」の充実です。ヒト、モノ、チエ・ワザで実現するアウトリーチ教育プログラムは、まさに国際理解教育を「主体的・対話的で深い学び」を多様な教育現場で実現するものといえるでしょう。本プロジェクトは、国際理解教育を単に外国に関する情報を記憶する知識の詰め込みとしてではなく、この先出会う多様な背景を持つ他者と協働して、創造的に問題解決に取り組むための姿勢・能力を育成するものと考えています。こうした姿勢・能力は、今後もさまざまな技術革新で変化が加速していく社会において、学校での学びにとどまらず生涯にわたって求められるのではないのでしょうか。今後も本プロジェクトは、ヒト、モノ、チエ・ワザを最大限に活かした学びを提供することで、学内外の現場の教育に貢献してまいります。

岩本貴永（アウトリーチ教育コーディネーター・エデュケーター）

桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ
Vol. 6 2017年度 20周年記念号

発行日 2018年6月1日

編集・発行

桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト

石塚 美枝

清水 貴恵・岩本 貴永

〒194-0294

東京都町田市常盤町 3758

桜美林大学 其中館 301

kusanone@obirin.ac.jp

<http://www2.obirin.ac.jp/kusanone/>



桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ

Vol. 6 2017年度

20周年記念特集号

文章・写真・図表等の無断転載・複製を禁じます。